

石田遺跡 発掘調査報告書

1993

山形県教育委員会

いし だ
石 田 遺 跡
発 挖 調 査 報 告 書

平成5年3月

山形県教育委員会



遺跡全景(南方より 右が鳥海山)



B区北半部遺構検出状況(北西より)

序

本書は、平成4年度に山形県教育委員会が発掘調査を実施した石田遺跡の調査成果をまとめたものです。

石田遺跡は山形県の北部、秋田県との境界を成す鳥海山の麓となる遊佐町に所在します。遊佐町は出羽富士と呼ばれる鳥海山の麓一帯を行政区画とし、鳥海山の雪解け水を良質の米作に利用し、日本有数の米作地帯であります。

調査では、平安時代の掘立柱建物跡・土坑・溝状遺構・旧河川跡などの遺構、遺物では土師器・須恵器・赤焼土器・綠釉陶器・石製品・鉄製品・土製品・木製品のほか、中世期の陶器や磁器が出土しています。

埋蔵文化財は私たちの祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な国民的財産であり、一度壊されてしまえば二度と元に戻らないものです。調査により明らかにされた遺跡は過去の生活を彷彿と再現してくれるものです。祖先の歴史を学ぶと共に愛護し、子孫へと保存し伝えていくことが、現代に生きる私たちに課せられた重要な責務と言えるでしょう。

山形県教育委員会では、「心広くたくましい県民の育成」と「地域文化の環境づくり」という立場から、今後とも県民福祉の向上を目的とした地域社会の整備と調整を図りながら、埋蔵文化財の保護に努力を継けていく所存であります。

本書が埋蔵文化財に対する保護思想の普及もかねまして、皆様のご理解の一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた地元の方々をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

平成5年3月

山形県教育委員会

教育長 木場精耕

例　言

- 1 本報告書は、山形県農林水産部の委託を受けて、山形県教育委員会が平成4年度に実施した県営圃場整備事業（月光川右岸地区）に係る石田遺跡緊急発掘調査である。
- 2 発掘調査は平成4年4月23日～同年9月3日までの、延べ95日間である。
- 3 遺跡は山形県飽海郡遊佐町野沢字石田他に所在する。
- 4 調査体制は以下の通りである。

調査主体　　山形県教育委員会
調査担当　　山形県埋蔵文化財緊急調査団
調査担当者　事務局長補佐　佐々木洋治
　　　　　　　主任調査員　野尻　侃（調査主任）
　　　　　　　調査員　　渡邊　俊一
事務局　　事務局長　深瀬　征二
　　　　　　事務局長補佐　鈴木　常夫
　　　　　　事務員　　渋江正義・松本明美・野本久美子
　　　　　　　　大内千賀子・志田恵子・長橋陽子

- 5 本報告書の作成は、野尻　侃・渡邊俊一が担当し、挿図・図版の作成補助には、平泉美和子・渡辺由美子・松田京子・岩田しげ子があたった。本書の編集は野尻　侃・安部　実が担当し、全体については佐々木洋治が監修した。
- 6 委託業務は下記の通りである。

遺物写真実測　　シン技術コンサル
資料サンプル分析　　パリノ・サーヴェイ

- 7 出土遺物については、山形県教育委員会が一括保管している。
- 8 発掘調査および本書を作成するにあたり、下記の機関、方々からご協力、ご助言をいただいた。（順不同、敬称略）

山形県農林水産部　山形県庄内支庁月光川土地改良事務所
山形県教育庁文化課　庄内教育事務所　八幡町教育委員会

凡 例

1 本書で使用した遺構の分類記号は以下の通りである。

S B 堀立柱建物跡 S E 井戸跡 S G 旧河川跡 S K 土坑
S D 溝状遺構 S A 柱跡列 S X 性格不明遺構 E P 組合
せ不明柱穴 E B 建物跡柱跡 とし、基本的には現地調査段階での検出順に従って番号を付した。

遺物に付した記号は、R P 土器・土製品 R W 木製品 R Q 石製品
R M 金属製品 R X 不明遺物 であり、検出順に番号を付した。

2 報告書作成、執筆の基準は以下の通りである。

- (1) 遺構分布図、同平面図中の方位は磁北を示している。なお、グリッド南北軸は磁北より、18°'00' 東に傾いている。また、建物跡の主軸方向は南北棟を平行、東西棟は、梁行で測定した。
 - (2) 遺構実測図では1/40から1/60他の縮図で採録し、各々にスケールを付した。
 - (3) 遺物実測図・拓影図・図版は原則的に1/4で採録したが、大形の土器や、木製品については1/6とし、各々にスケールを付した。
 - (4) 土器実測図・拓影図の断面では、白ヌキが土師器、黒ベタが須恵器、断面に●印が赤焼土器を表している。また、土師器で内黒のものは内面に網点を、両黒は内外面両端に網点を入れた。
 - (5) 遺物観察表中の計測値欄で、() 内数值は図上復元による推定値ないし残存値を示している。出土地点欄の層位では、「F」は遺構覆土内出土、「Y」は遺構底面出土を示し、ローマ数字「I～IV」等は、遺跡を覆う土層（基本層序）を表している。
 - (6) 遺物番号は、実測図・観察表・図版とともに共通とした。また、本文中の番号も共通とした。
- 3 調査では、圃場整備計画図に示されているBM3(標高10.570m)杭を利用し、A・B調査区に断面測図のため、BM杭(10.270m)を設置し、これより断面測図の高さを各遺構毎に求め、挿図にはそのレベルを記載した。

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の経過	1
II 遺跡の立地と環境	
1 地理的環境	4
2 歴史的環境	4
3 遺跡の層序	4
III 検出遺構	
1 遺構の分布	11
2 掘立柱建物跡	11
3 土坑	15
4 溝状遺構	20
5 旧河川跡	20
IV 遺物	
1 遺物の分布	25
2 掘立柱建物跡出土遺物	25
3 土坑内出土遺物	25
4 溝状遺構出土遺物	30
5 旧河川跡出土遺物	30
6 性格不明遺構出土遺物	36
7 包含層出土遺物	36
V まとめ	
1 遺構について	45
2 出土遺物について	46
3 遺跡の性格について	46

表

表1 調査工程表	2
表2 出土遺物観察表(1)建物跡・土坑	28
表3 出土遺物観察表(2)土坑・溝状遺構	33
表4 出土遺物観察表(3)溝状遺構	35
表5 出土遺物観察表(4)溝状遺構・性格不明遺構	38
表6 出土遺物観察表(5)性格不明遺構・包含層	40
表7 遺跡詳細分布調査出土遺物観察表(1)	43
表8 遺跡詳細分布調査出土遺物観察表(2)	44

挿 図

第1図 遺跡概要図	3
第2図 遺跡位置図(S=1/25,000)	5
第3図 A区遺構配置図	7・8
第4図 B区遺構配置図	9・10
第5図 S B 1 建物跡	12
第6図 S B 2・3 建物跡	13
第7図 S B 4・5 建物跡	14
第8図 S K 22・23・25・66・70～72・313土坑、S D 57・154溝状遺構	16
第9図 S K 28・36・39・41・46～47・50・60・69・78・98・115・116土坑、 E P 84柱穴	17
第10図 S K 24・33・37・38・42・44・49・52土坑、E P 45・112・141柱穴	18
第11図 S K 29～32・34・527～530土坑、E P 35柱穴	19
第12図 S K 75・502・510・525・526・573・601・721・756・758・760土坑、 S D 74・511・534～536溝状遺構、E P 572柱穴	21
第13図 S D 8・26・55・56・65・92・93・95・106溝状遺構、 E P 153・191・205柱穴	22
第14図 S D 67・89・114・540～542溝状遺構、S K 533土坑、 E P 99・113・539・551柱穴	23
第15図 S D 59・90・512～517溝状遺構、S K 40・91土坑、E P 109・111柱穴	24
第16図 建物跡出土遺物	26
第17図 土坑内出土遺物(1)	27
第18図 土坑内出土遺物(2)	29
第19図 土坑内出土遺物(3)、溝状遺構出土遺物(1)	31
第20図 溝状遺構出土遺物(2)	32
第21図 溝状遺構出土遺物(3)	34
第22図 旧河川跡出土遺物	36
第23図 性格不明遺構出土遺物	37
第24図 包含層出土遺物	39
第25図 遺跡詳細分布調査出土遺物(1)	41
第26図 遺跡詳細分布調査出土遺物(2)	42

図 版

- 図版1 遺跡全景
- 図版2 遺跡遠景他
- 図版3 A区遺構検出状況
- 図版4 B区遺構検出状況他
- 図版5 A区遺構検出状況全景
- 図版6 S B1~4建物跡検出状況
- 図版7 S B5建物跡検出状況他
- 図版8 S D67・S K24遺物出土状況
- 図版9 遺構土層断面(1)
- 図版10 遺構土層断面(2)
- 図版11 土坑内遺物出土状況
- 図版12 遺構完掘状況他
- 図版13 遺物出土状況(1)土器
- 図版14 遺物出土状況(2)土器・木製品
- 図版15 出土遺物(1)建物跡・土坑
- 図版16 出土遺物(2)土坑
- 図版17 出土遺物(3)土坑
- 図版18 出土遺物(4)土坑・溝状遺構
- 図版19 出土遺物(5)溝状遺構
- 図版20 出土遺物(6)溝状遺構
- 図版21 出土遺物(7)溝状遺構
- 図版22 出土遺物(8)溝状遺構・旧河川跡・性格不明遺構
- 図版23 出土遺物(9)性格不明遺構
- 図版24 出土遺物(10)性格不明遺構・包含層
- 図版25 出土遺物(11)包含層
- 図版26 遺跡詳細分布調査出土遺物(1)
- 図版27 遺跡詳細分布調査出土遺物(2)

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

遊佐町には数多くの遺跡が確認されている。県内市町村の中でも遺跡が確認されている数が多い地域もある。その遺跡の在り方は遊佐町管内の水田地帯や、鳥海山山麓から延びる台地上に旧石器時代から近世期にかけての各時代の遺跡が点在している。これらの遺跡は、月光川、庄内高瀬川等の中河川が形成した沖積平野の微高地や、河川の自然堤防上に立地している。

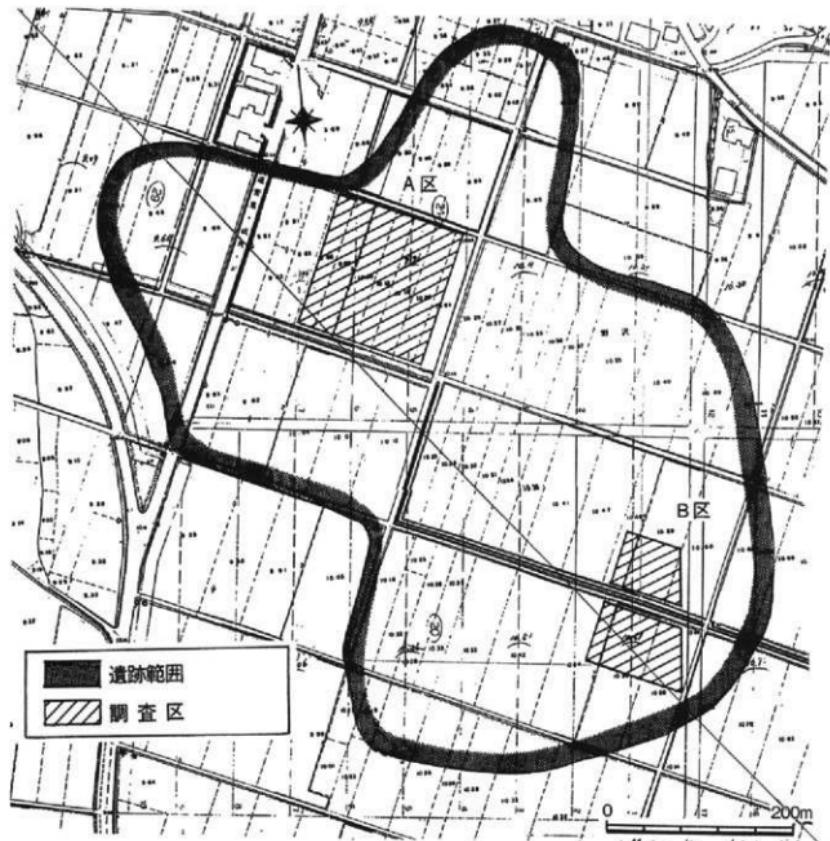
昭和 60 年度から開始された県営の大規模圃場整備事業（月光川左岸地区・高瀬川右岸地区等）では、現在まで多くの遺跡発掘調査が進められている。平成 4 年度には月光川上流地区として圃場整備事業が計画され、山形県教育委員会では平成元年度と 3 年度に実施されていた遺跡詳細分布調査の結果から東西 150 m、南北 190 m の範囲 (28,500 m²) に遺跡の広がりが確認された。この結果をもとに県農林部と保存協議を進め、現状保存を基本とした施工方法の検討を重ね、止むを得ず削平される地域（遺跡西部 5,000 m² および南東部 3,000 m²）を対象に緊急発掘調査を実施することで合意された。調査は山形県教育委員会が主体となり、山形県埋蔵文化財緊急調査団が調査を担当した。調査期間は、平成 4 年 5 月 11 日から 8 月 21 日までの実働 70 日間である。

2 調査の経過（表 1）

調査は先に遺跡詳細分布調査の結果に基づき、遺跡全域を包み込むように圃場整備事業の計画杭 (No. 25) を起点に現水田の畦畔線に合わせ、5 m を 1 単位とするグリッドを設定した。調査は、圃場整備事業計画による削平される区域で転作が施された地区（A 区）と、遺跡南東部で、地盤が高く、削平される地区（B 区）が対象となった。調査の工程は、当初 A 区を前期調査区として 5 月 11 日から開始し、重機による粗掘りを行い、面整理による遺構・遺物の検出を実施した。面整理では、旧河川跡と考えられる溝状の遺構が調査区北側に確認された。また、同遺構の南側には、土坑や、掘立柱建物跡に構成される柱穴や、5 ~ 6 m の長さで幅 20 ~ 35 cm の同一方向となる溝状遺構が確認されている。遺構は検出順次に番号を付し、断面観察、出土遺物登録、平面図測図、写真撮影等の諸記録を行い、7 月 11 日には A 区の調査を終了した。また、A 区の記録と平行に遺跡南東部の B 区を重機により粗掘りし、順次面整理を行なながら遺構・遺物の集中地区の確認を実施した。その結果、現用水路をはさむように遺構が検出され、平成 3 年度に農道部分の調査で確認された遺構の続きと思われる溝跡や、土坑も B 区北側で確認された。このことから平成 3 年度の調査成果を参考に調査を進め、A 区と同

調査内容	日	5月		6月			7月			8月					
		11日 ～ 15日	18日 ～ 22日	25日 ～ 29日	1日 ～ 5日	8日 ～ 12日	15日 ～ 19日	22日 ～ 26日	29日 ～ 3日	7日 ～ 10日	13日 ～ 17日	20日 ～ 24日	27日 ～ 31日	3日 ～ 7日	17日 ～ 21日
実 調 査 日 数		5	5	5	5	5	5	5	5	4	5	5	5	5	5
準備	資材準備				■										
	発掘区設定			■■						■■■					
粗掘り	手掘り				■■■■					■■■■					
	重機使用			■■						■■					
面精査	面整理				■■■					■■■					
	遺構検出														■■■■■
遺構精査	A区建物跡									■					
	土坑										■■■				
	溝状遺構										■■■				
	その他の										■■■				
	B区建物跡											■			
	土坑											■■■■■			
	溝状遺構											■■■■■			
	その他の											■■■■■			
測図作業	水糸張り							■				■			
	土層断面					■									
	平面実測							■■■■■				■■■■■			
	レベルイング							■■■■■				■■■■■			
写真	全体写真				■					■					
	細部写真							■■■■■				■■■■■			
備考															

表1 調査工程表



第1図 遺跡概要図 (S=1/400)

様に同一方向に向かう溝跡や、掘立柱建物跡に結びつく柱穴等の遺構が検出された。これらの遺構を順次掘り下げ、遺構番号登録、写真撮影、遺物集中遺構の平面図測図等、諸記録を行い、8月21日には全調査を終了した。また、8月19日には県民や地元地区民に調査説明会を実施した。

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

出羽富士と呼ばれる鳥海山はその端正な雄姿を北東方に望み、眼下の平野部には豊富な水量を生み出している。庄内平野の北部を占める飽海地区にはこの鳥海山を源とした日光川、月光川、庄内高瀬川等の河川がその恵みを平野部へ潤しており、平野部での出口では小扇状地を形成している。

流入河川のひとつである庄内高瀬川は鳥海山の南東山麓を源として飽海地区北部の水田へ蛇行しながら流れ、所々で河川流入の特徴である自然堤防を築いている。しかし、平野の主要部分は庄内三角洲地帯であり、海拔3~7mのきわめて低平な平野部となっている。これらの自然堤防上には河川の流路に沿った所々に平安時代の集落跡が点在している。これらの集落跡はその分布状況が月光川の右岸と左岸とではその立地条件や、歴史的条件等により、分布の在り方に差異が認められる。

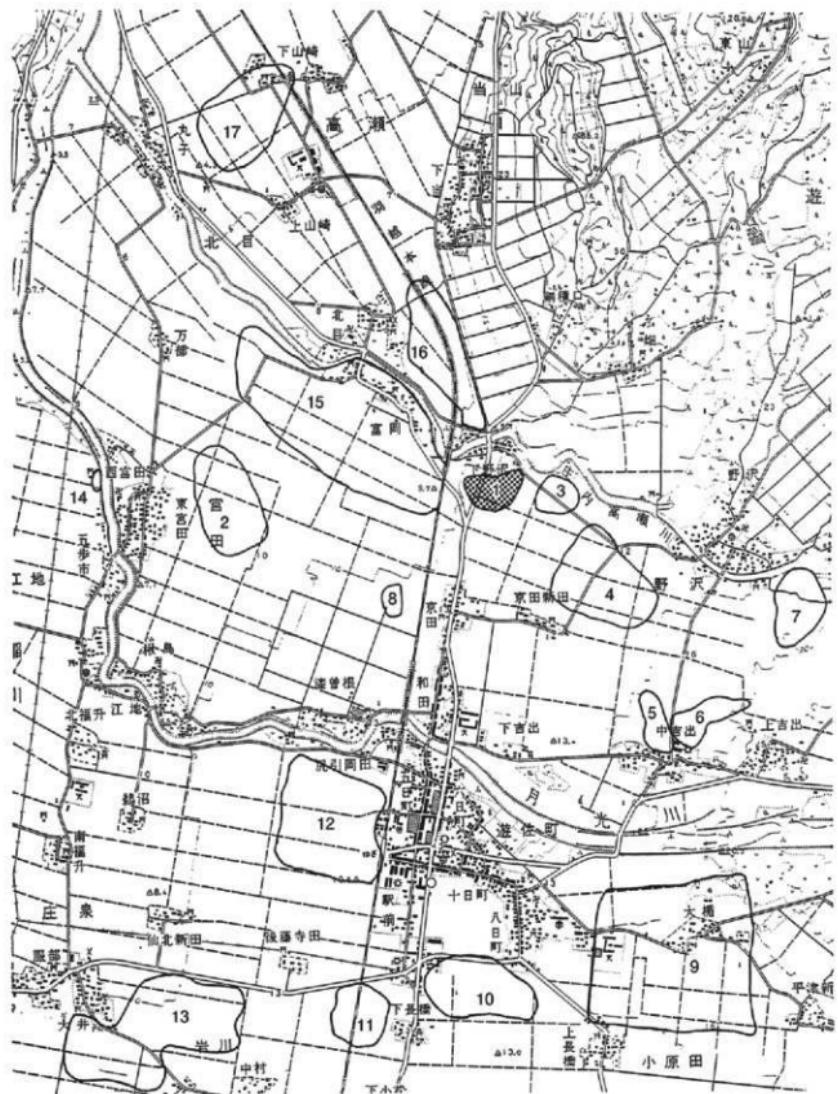
2 歴史的環境

庄内地方には平安時代の遺跡が数多く点在している。その多くは酒田市に所在する国指定史跡「城輪柵跡」を中心に、平野東側は出羽丘陵の辺縁部までと、西側は標高5m前後の沖積地の自然堤防上に存在する。

庄内平野での平安時代の集落跡は、平野部全体に存在するが、平野部を貫流する最上川によって平野北部と南部に東西に二分される。最上川北側（右岸）地域は飽海地区と、南側（左岸）地域は田川地区と呼称される。右岸北側の地域には国指定史跡として保護されている「城輪柵跡」を中心に計画的に集落跡を配置されたことを窺わせる遺跡が点在する。また、城輪柵跡より北方に西流する月光川や庄内高瀬川周辺には多くの遺跡が点在し、高瀬川沿いに限っても9世紀代に営まれた北目長田遺跡、幡待遺跡、筋田遺跡、野瀬遺跡、中田浦遺跡、上高田遺跡等の集落跡が連続して分布しており、平安時代の飽海地区における古代開拓様相を窺うことが出来る。

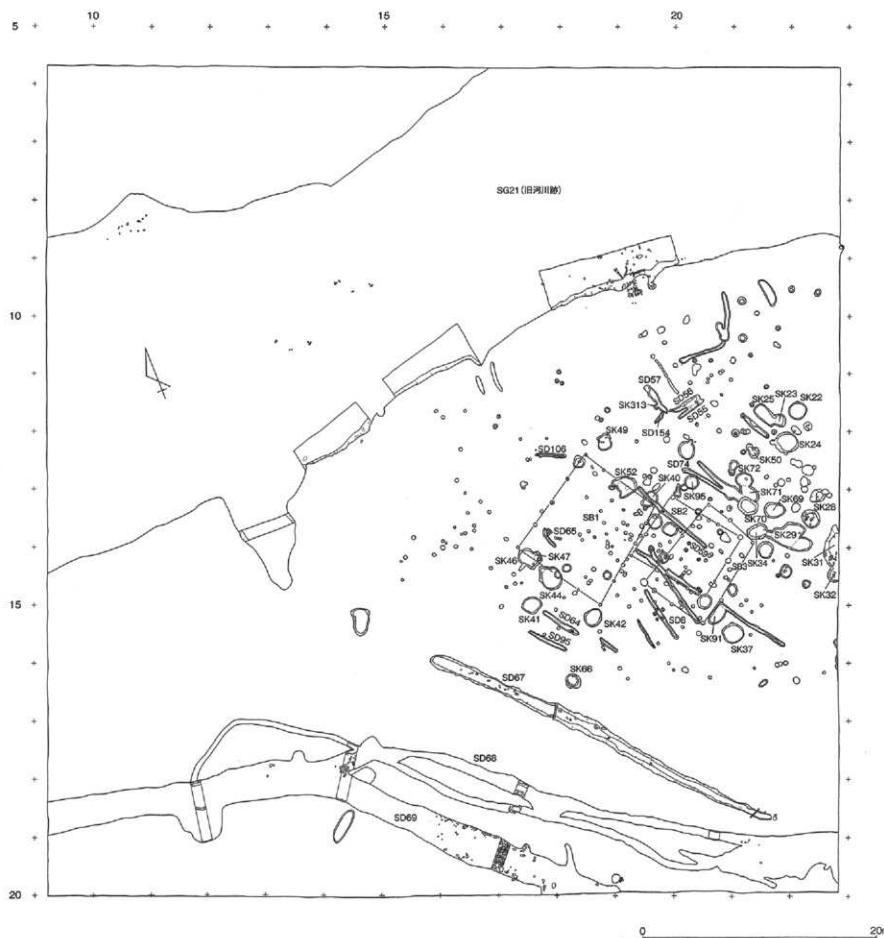
3 遺跡の層序

遺跡を覆う土層は3層に分かれ、I層は黄褐色の耕作土で厚さ13~18cmに、II層は灰黄褐色の水田基盤層で厚さ5~8cmを測る。III層は黒褐色粘質土で、厚さ10~15cmに堆積し、遺物包含層である。IV層は黄灰色砂質土で地山の構造検出面である。構造はIV層で溝状構造や土坑、柱穴が確認できた。

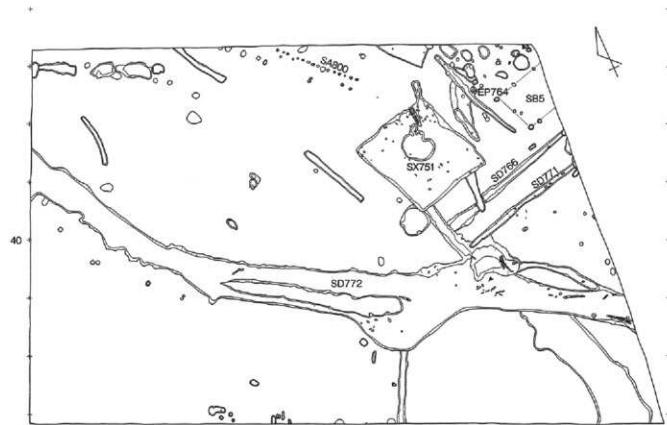
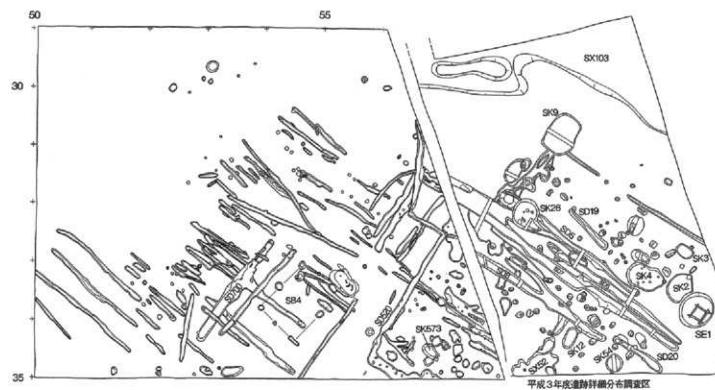


第2図 遺跡位置図 (S=1:25,000)

- | | | | | | |
|----------|----------|------------------|-----------|-----------|----------|
| 1. 石田遺跡 | 2. 木原遺跡 | 3. 宅田遺跡 | 4. 大坪遺跡 | 5. 三田遺跡 | 6. 袋古遺跡 |
| 7. 仁田田遺跡 | 8. 古屋敷遺跡 | 9. 大橋遺跡 | 10. 浮橋遺跡 | 11. 下長橋遺跡 | 12. 小深遺跡 |
| 13. 東田遺跡 | 14. 宮田遺跡 | 15. 上高田・木戸下・道内遺跡 | 16. 宮の下遺跡 | 17. 中田浦遺跡 | |



第3図 A区遺構配置図



第4図 B区遺構配置図

III 検出遺構

1 遺構の分布

石田遺跡の調査面積は東西 350 m、南北 400 m の約 140,000 m² の規模と把握され、分布調査ではいくつかの遺構がまとまりをもちながら集合した集落と捉えている。遺跡が所在する地域一帯に対して実施した試掘調査では、従来の周知登録されている範囲の広がりと、遺構・遺物の集中区域を確認している。調査では、掘立柱建物跡 5 棟、土坑 59 基、溝状遺構 75 条の他、調査 A 区の北側で旧河川跡の流路が西から東側へ確認され、流路の南側には、掘立柱建物跡、土坑等が存在し、それらを囲むように溝状遺構が数条存在する。B 区では、2 棟の建物跡と柱列 1 条、土坑、溝状遺構が検出されている。ここでは、柱穴の組み合わせが確認され、掘立柱建物跡として登録した遺構、土坑、溝状遺構等、A 区・B 区で検出された遺構についてまとめて記述する。

2 掘立柱建物跡

A 区では 3 棟の建物跡が構成された。S G 21 旧河川跡の南側に位置し、同方向の主軸を測る 3 棟の建物跡である。

S B 1 建物跡（第 5 図、図版 6）

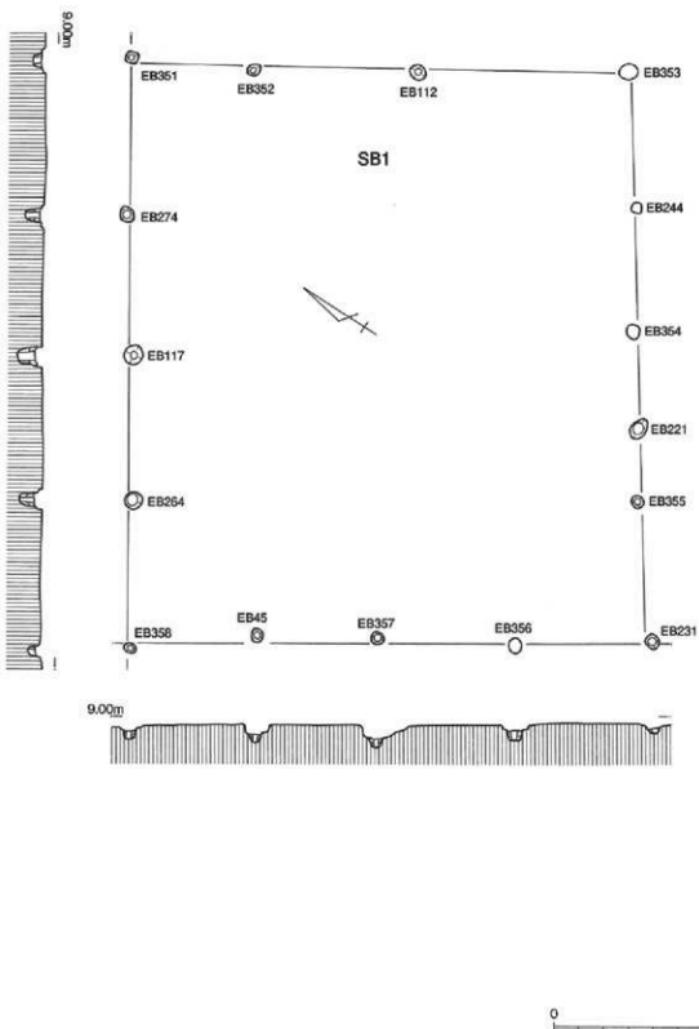
A 区中央部 17 ~ 19 - 12 ~ 14 グリッドⅢ層上面で確認された東西四間、南北三間の東西棟である。身舎の規模は桁行 10.8 m、梁行 8.4 m を測る。柱間距離は北面桁行 E B358・264・117・274・351 柱穴では各柱間は 2.7 m (9 尺) 等間である。西面梁行 E B 358・45・357・356・231 柱穴では 2.1 m (7 尺) 等間である。柱穴掘り方は径 20 ~ 35 cm の円形または隅丸方形を呈し、深さ 20 ~ 40 cm を測る。掘り方内には径 16 ~ 18 cm の柱の跡が残っていたが柱根は残存していない。E B 231 柱穴の覆土から第 16 図 14 の内黒土器片が出土している。建物跡の主軸方位は N - 06 - W である。

S B 2 建物跡（第 6 図、図版 6）

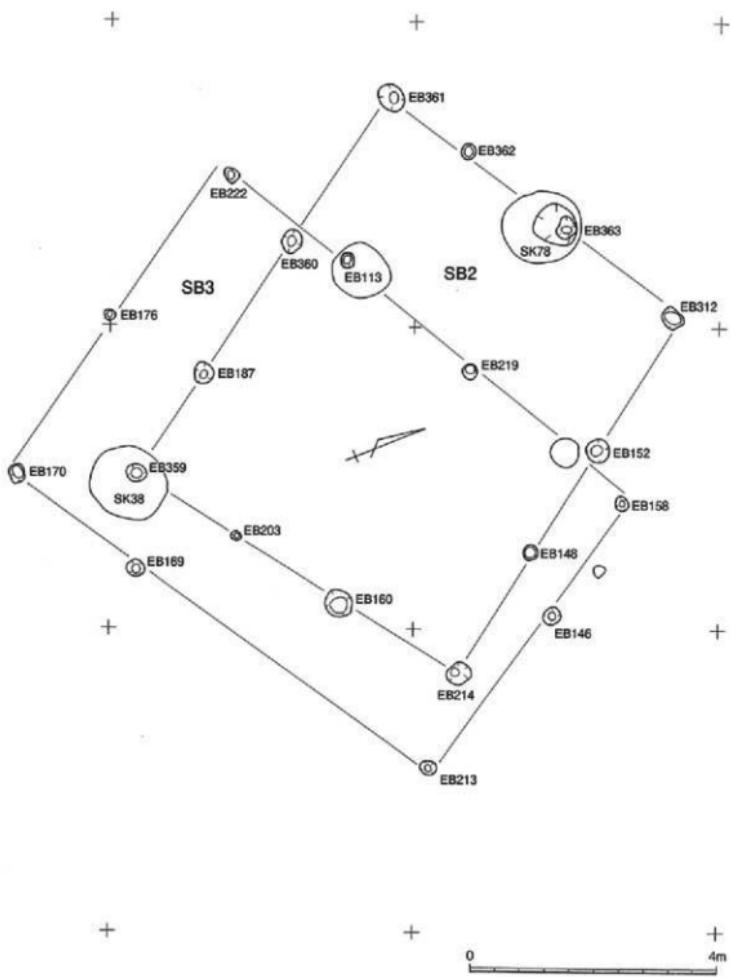
A 区 S B 1 建物跡に隣接して確認された東西三間、南北三間の南北棟である。身舎の規模は桁行長 7.2 m、梁行長 4.8 m を測る。柱間距離は北面桁行 E B 361・362・363・312 柱穴では 2.4 m (6 尺) 等間である。南面桁行 E B 359・203・160・214 柱穴で 2.1 m (7 尺) 等間である。西面梁行 E B 312・152・148・214 柱穴では 2.7 m (9 尺) 等間である。柱穴掘り方は径 20 ~ 35 cm の円形または梢円形を呈し、深さ 15 ~ 35 cm の柱の痕跡が残っていたが、柱根は残存しない。また、土器片等の遺物の出土はなかった。建物跡の主軸方向は N - 18 - E である。

S B 3 建物跡（第 6 図、図版 6）

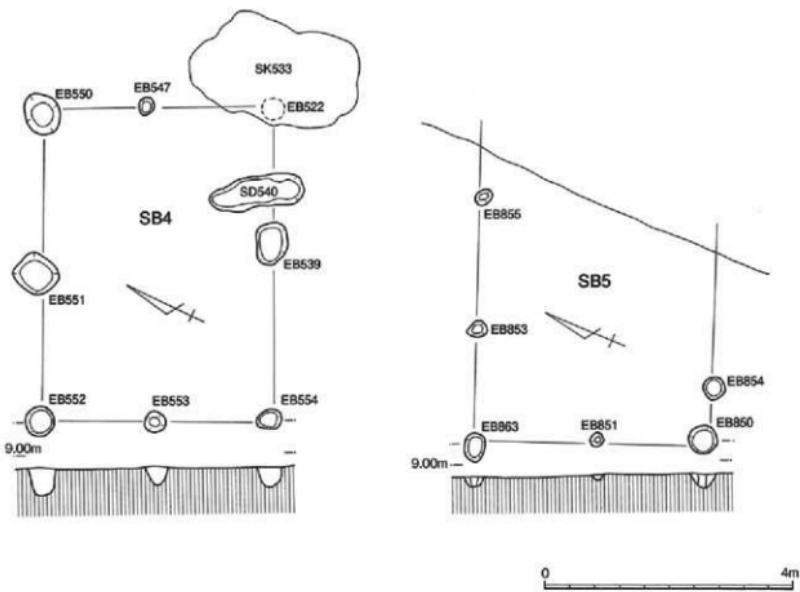
A 区 S B 2 建物跡と重複し確認された東西三間、南北二間の東西棟である。身



第5図 SB1建物跡



第6図 SB2・3建物跡



第7図 SB4・5建物跡

舎の規模は桁行長 8.2 m、梁行長 5.9 m を測る。柱間距離は北面桁行 E B 222・113・219・158 柱穴は 2.4 m 等間の柱間距離である。南面桁行では E B 170・169・213 柱穴は 2.7 m 等間である。柱穴掘り方は径 20～35 cm の円形または楕円形を呈し、深さ 10～40 cm の柱の痕跡が残っていたが、柱根は残存しない。建物跡の主軸方向は N - 21 - E である。

S B 4 建物跡（第7図、図版6）

B 区北側調査区のやや中央部で確認した。東西二間、南北二間のやや南北に長い身舎をもつ建物跡である。身舎の規模は桁行長 4.8 m を測る。柱間距離は北面桁行 E B 552・551・550 柱穴では 2.7 m 等間である。南面梁行では E B 554・539 が認められたが、身舎角となる柱跡が S K 533 土坑に掘り込まれ、北面桁行との構成で S K 533 内に存在したものと考える。柱間距離は北面距離と同様である。建物跡の主軸方向は N - 82 - W である。遺物の出土はない。

S B 5 建物跡（第7図、図版7）

B 区調査区東側北東部で確認された東西三間以上、南北二間の東西棟である。身舎の規模は桁行長 480 cm 以上、梁行長 390 cm を測る。柱間距離は北面桁行では E B 863・853・855 柱穴は 1.8 m 等間である。柱穴掘り方は径 25 cm～46 cm の円形または楕円形を呈し、深さ 15～28 cm の痕跡は残っていたが、柱根は残存しない。遺物の出土はない。建物跡の主軸方向は N - 82 - E である。

3 土坑

検出された 156 基の土坑のうち、まとまった遺物を出土した土坑の多くは、A・B 区に溝状遺構と共に集中して確認された。土坑内で遺物が集中して出土した土坑は検出されたその形状や、規模等の特徴で分けることができ、ここでは 53 基の土坑を図示した。下記の SK 22・39・24・42 の土坑は皿状になるものが多く、時期も土器の形状や、編年から 10 世紀初頭が当たられる。また、SK 525・527・32 土坑は U 字状の断面形を呈し、確認面からの深さが、約 50 ~ 28 cm と深く、土坑下部の覆土中からは有機物がブロック状に 6 ~ 20 cm の厚さに堆積しており、土坑が營まれた性格や時期に違いが窺える。出土遺物では、陶器や磁器が出土し、中世から近世にかけての時期が当たられる。

SK 22 土坑（第 8 図、図版 11）

A 区東側、22 - 11 グリッドⅢ 層上面で検出した隅丸方形を呈した土坑である。断面は皿状になり、覆土は 2 層に分かれる。F 1 層は黒色炭化物層、F 2 層は明褐色砂質層である。規模は長径約 150 cm、深さ約 8 ~ 12 cm を測る。底面は平坦で、土坑内には RP 23・24・25 の赤焼土器が出土した。

SK 39 土坑（第 9 図）

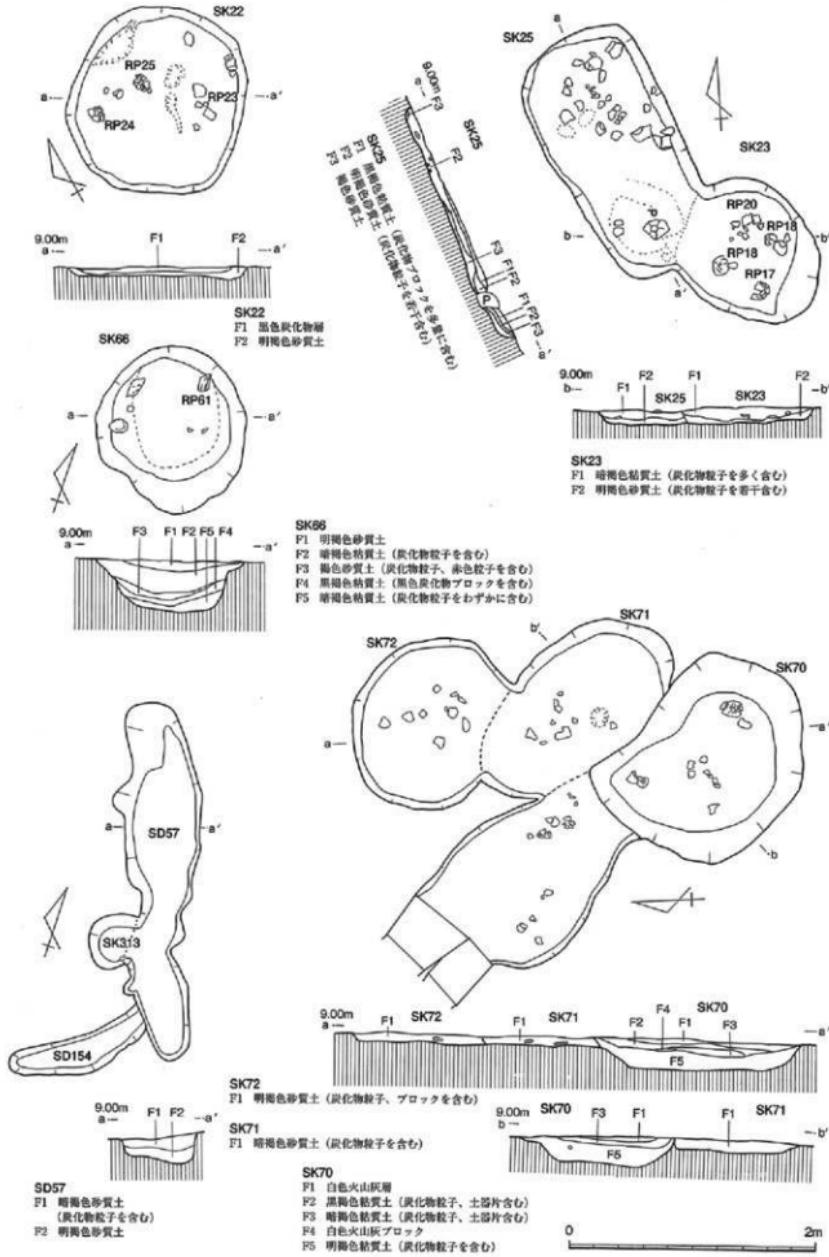
A 区中央、19 - 13 グリッドⅢ 層上面で検出したほぼ円形を呈した土坑である。断面形は皿上になるが、中心部で高まりを示す。規模は長径 160 ~ 165 cm、深さ約 10 ~ 12 cm を測る。底面はやや平坦で、覆土は 2 層に堆積する。F 1 層は明褐色砂質土で赤色粒子を含む。F 2 層は黒褐色砂質土で炭化物粒子を含む。土坑内には多数の土器片が出土した。

SK 24 土坑（第 10 図、図版 8）

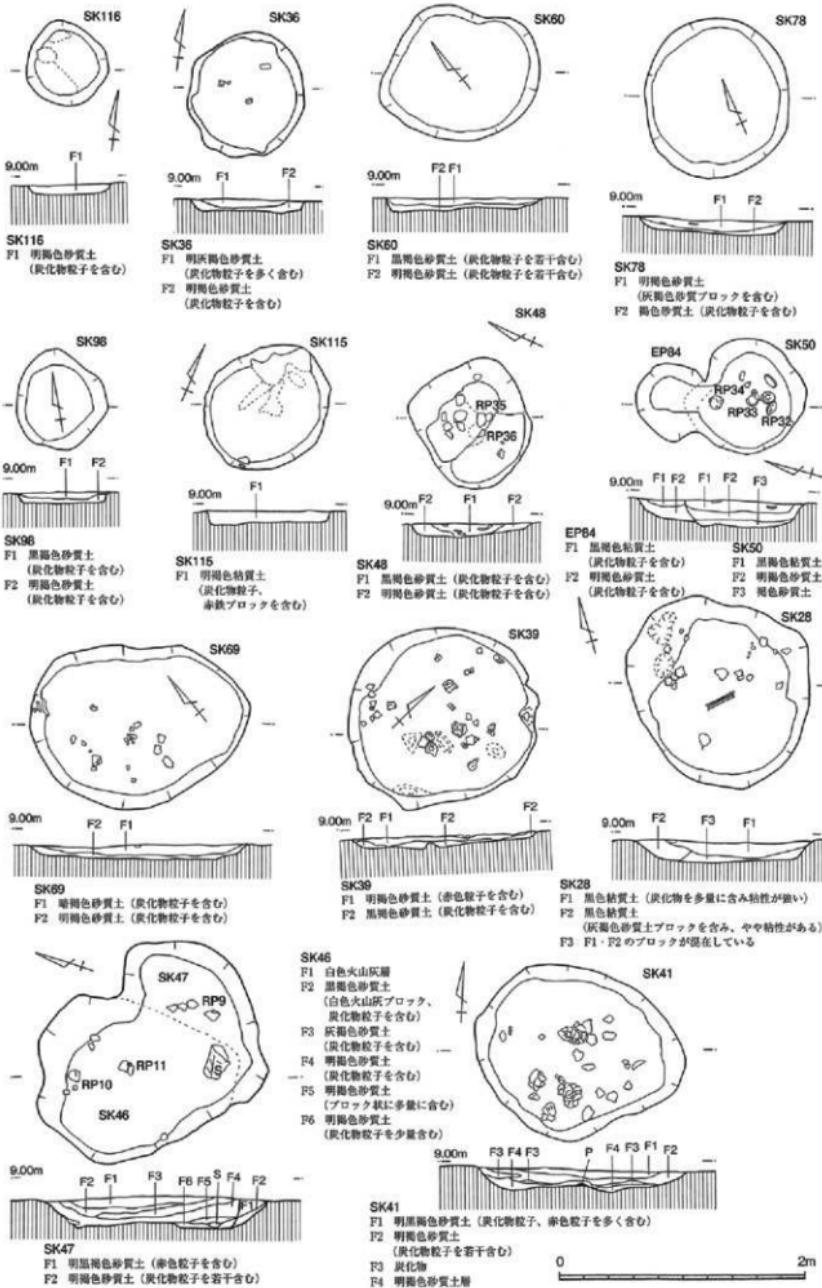
A 区東側、22 - 12 グリッドⅢ 層上面で検出した隅丸方形を呈した土坑である。断面形は皿状となり、規模は長径 200 ~ 210 cm、深さ約 8 ~ 12 cm を測る。覆土は 3 層に堆積し、F 1 層は黒褐色粘質土で若干の炭化物粒子を含む。F 2 層は明灰褐色砂質土で、一部に明褐色砂質土の F 3 層が入り込む。底面はやや平坦である。土坑内には多くの土器片が出土した。土坑の西では EP 141 柱穴を切って確認された。

SK 42 土坑（第 10 図、図版 11）

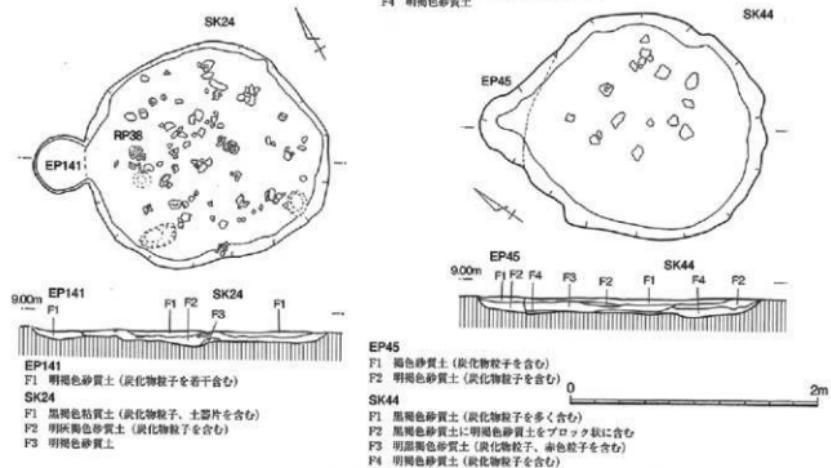
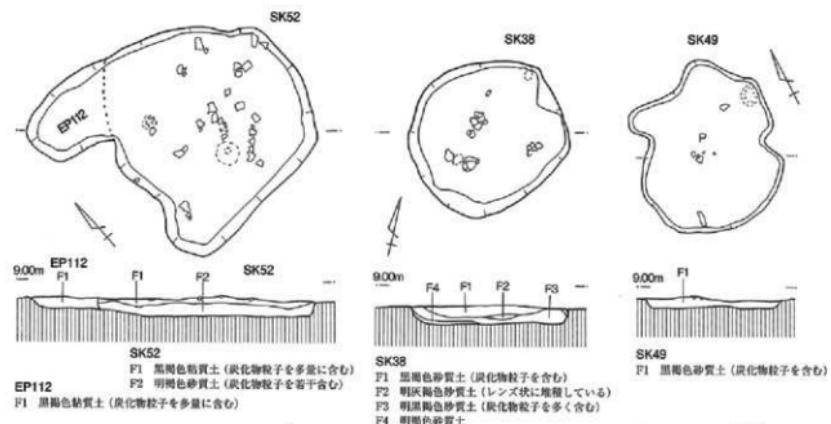
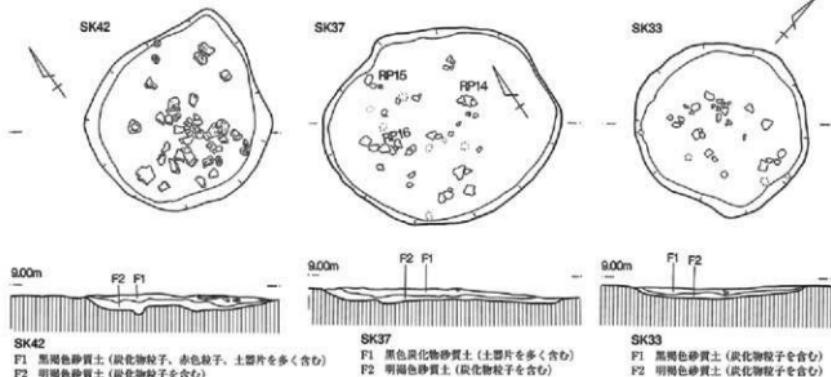
A 区中央、18 - 15 グリッドⅢ 層上面で検出したやや円形を呈した土坑である。断面形は皿状となり、規模は長径 150 ~ 160 cm、深さ 16 ~ 19 cm を測る。覆土は 2 層に堆積し、F 1 層は黒褐色砂質土で炭化物粒子、赤色粒子を多く含み、土器片が集中して出土した。F 2 層は明褐色砂質土で炭化物粒子を含む。



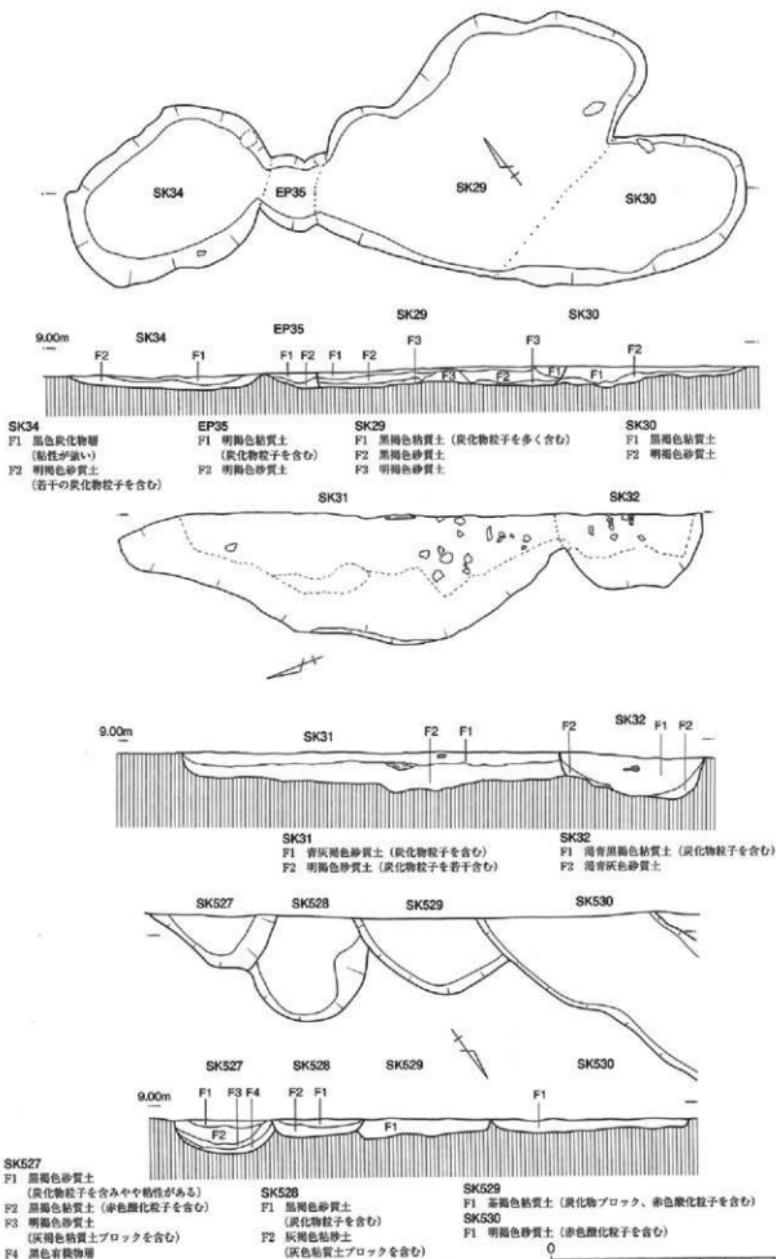
第8図 SK22-23-25-66-70-72-313土坑、SD57-154溝状構造



第9図 SK28・36・39・41・46～48・50・60・69・78・98・115・116、EP84柱穴



第10図 SK24・33・37・38・42・44・49・52土坑・EP45・112・141柱穴



第11図 SK29~32・34・527~530土坑、EP35柱穴

4 溝状遺構

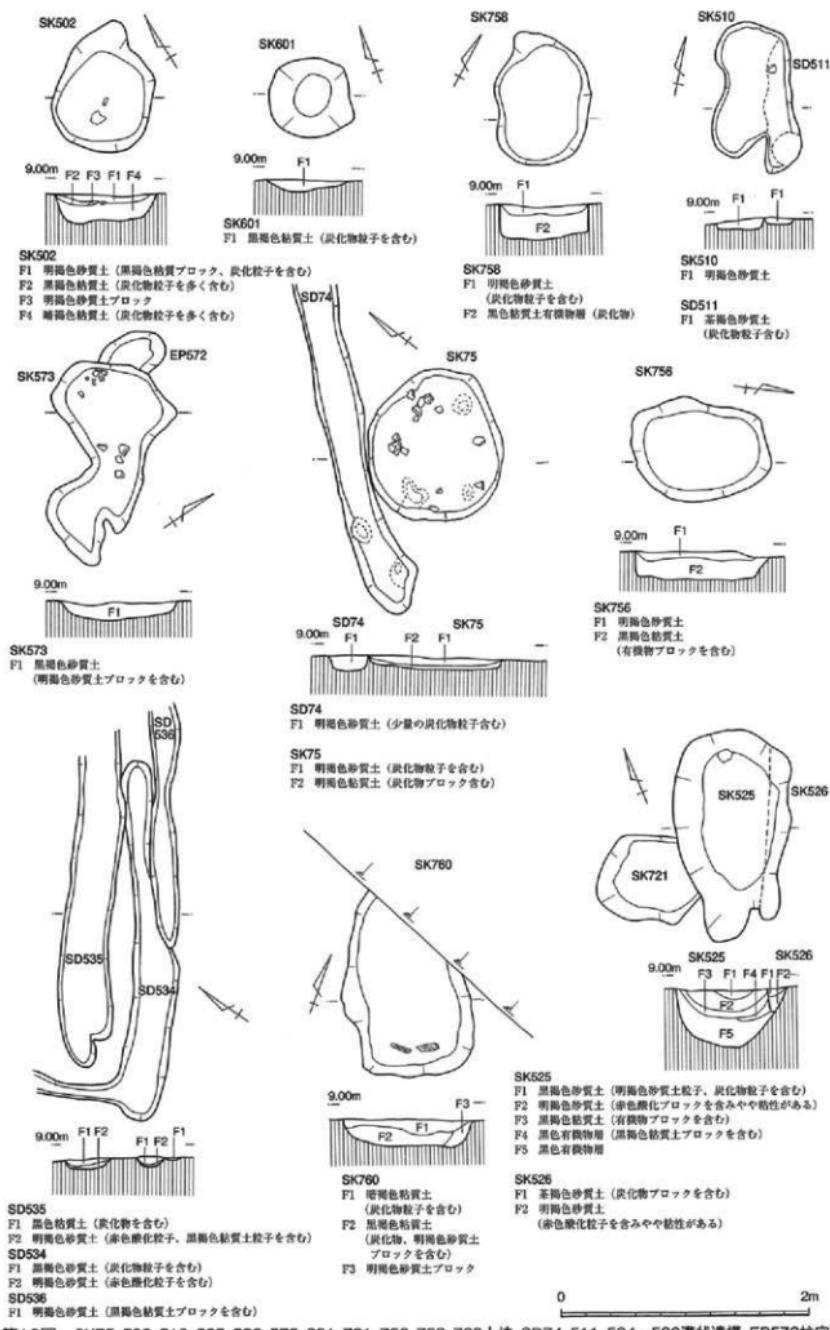
調査で検出された溝状遺構群はA・B調査区のほか、平成3年度に遺跡詳細分布調査を実施した際の調査区域でもやや東西に走る幅の広い溝状の遺構が確認されている。A調査区ではSG 21遺構とした埋没した旧河川跡と共に建物跡が確認されている。溝状遺構は建物跡の主軸方向と同一となるものと、やや軸がずれた方向がある。B調査区では、畠の畝状の溝跡が4～5条の単位で南北に並び、4～10mの長さで確認されている。これらは4～6のグループにまとまりを示している。ここではA調査区で検出したSD 67溝状遺構について説明する。

SD 67 溝状遺構（第14図、図版9）

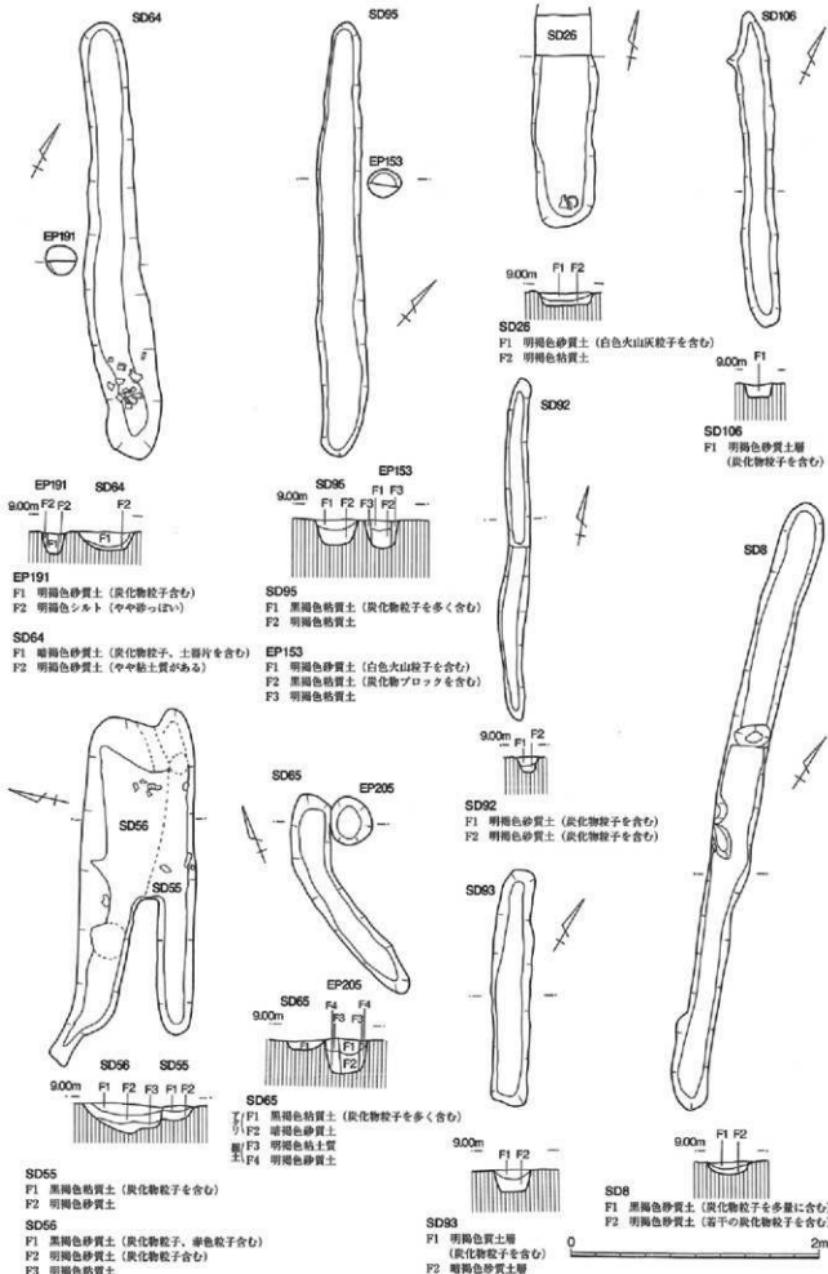
SD 67はA区南半部15～21-15～18グリッドⅢ層上面で確認したやや東西に約32mの長さで検出した溝状遺構である。幅約90～95cm、深さ約30～35cmを測り、覆土は4層に分かれる。F1層は黒褐色砂質層で赤色粒子を含む、F2層は灰色火山灰層で土器片や赤色粒子を含む、F3層は明褐色砂質層で、完形の土器や、土器片が多量に出土した。F4層は明褐色粘質土である。覆土のF2層には6～8cmの厚さに火山灰が堆積している。延喜15年（915年）に降灰したと「扶桑略記」に記載された記録では「出羽国言上雨灰降高二寸」とあり、F2層やF3層中からの出土土器は溝状遺構が営まれた時期を示す好資料となる。また、SK 46土坑からも覆土中に充満して確認されていることから、本遺跡が営まれた時期が推測される。

5 旧河川跡（第3図）

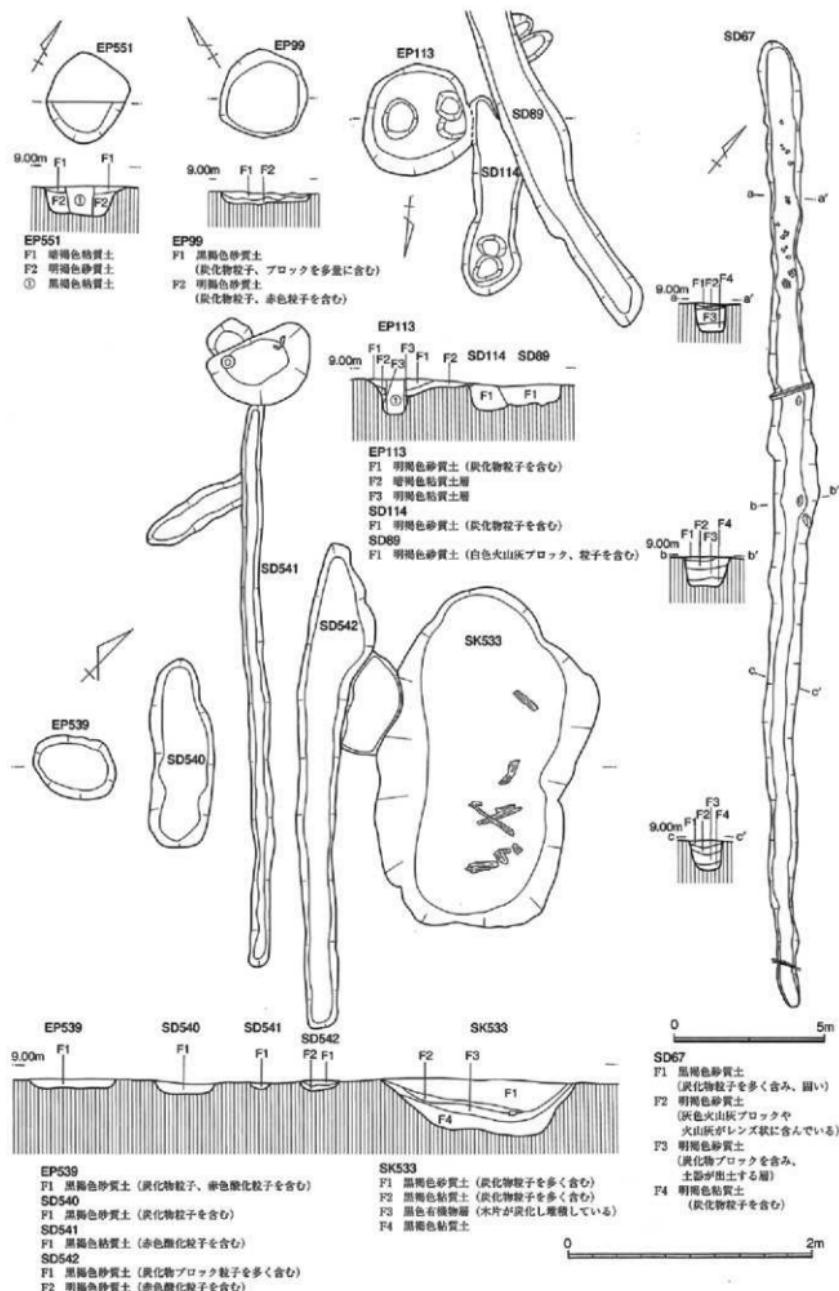
SG 21河川跡はA調査区の北西部に東西に確認された。幅約20～28m、長さ約80mに確認された。河川跡の堆積状況を確認するため、南岸部に流路の沿って幅1mのトレーニングを設定し、掘り下げの精査を実施、断面ではなだらかな傾斜を持ちながら中心部に向かって徐々に深くなるが、事業が圃場整備であることから掘り下げを中止した。調査では須恵器片や赤焼土器片が出土している。本遺跡の北方には庄内高瀬川が西流しており、遺跡が営まれた時期には本遺跡に流れていたものと考える。



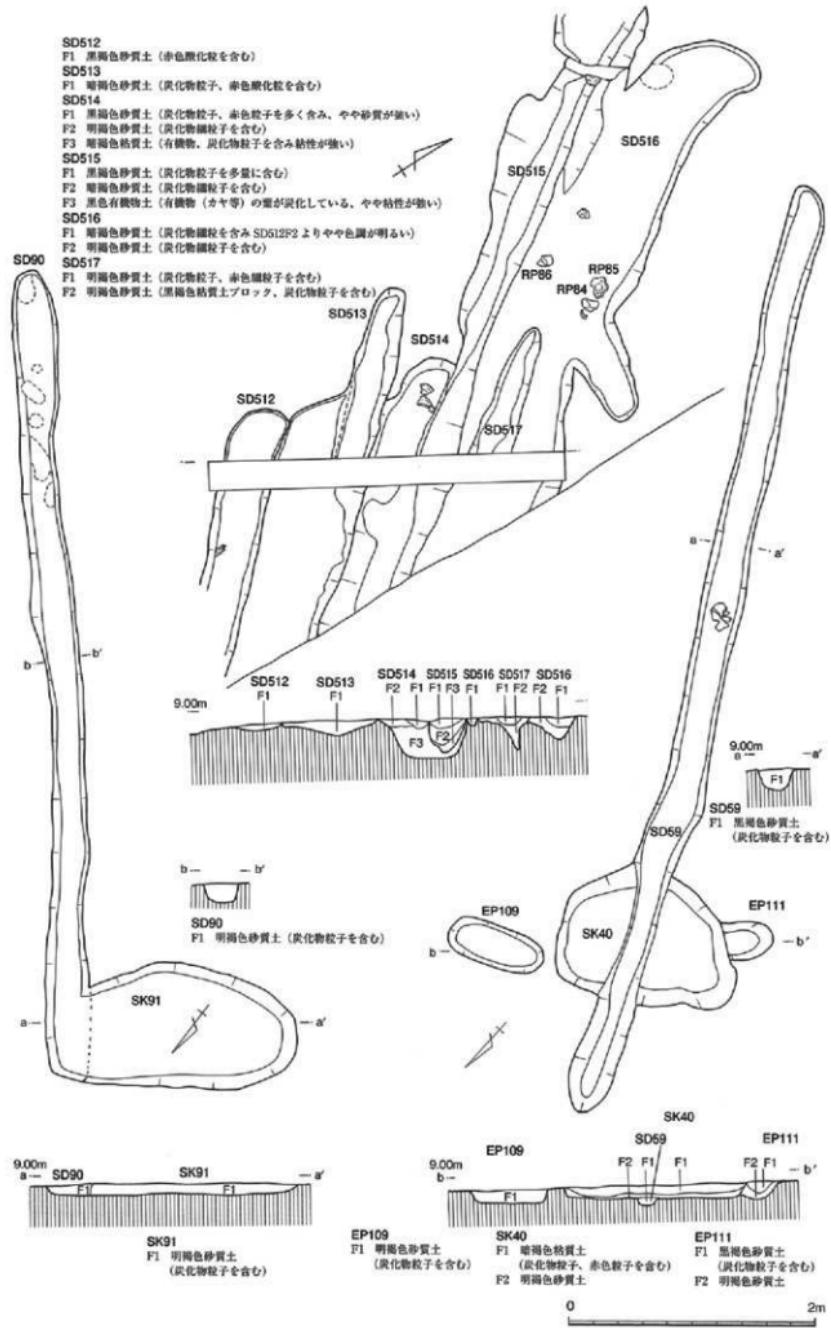
第12圖 SK75-502-510-525-526-573-601-721-756-758-760主坑、SD74-511-534~536溝狀遺構、EP572柱穴



第13図 SD8・26・55・56・65・92・93・95・106溝状遺構、EP153・191・205柱穴



第14図 SD67・89・114・540～542溝状遺構、SK533土坑、EP99・113・539・551柱穴



第15図 SD59・90・512～517溝状遺構、SK40・91土坑、EP109・111柱穴

IV 出土遺物

1 遺物の分布

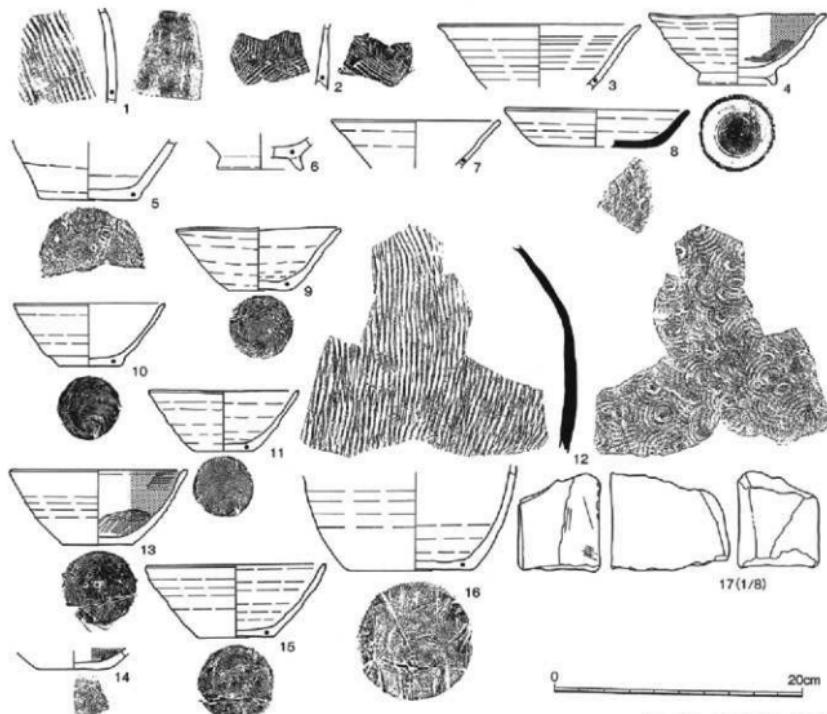
本調査で出土した遺物は整理箱にして60箱を数える。その内訳は土器が58箱、土製品・石製品・木製品2箱で、圧倒的に土器が多い。土器の種別では、内黒土器・須恵器・赤焼土器・青磁があり、その他、土錘・石帶・硯・古錢・箸・古槌・柱根等が出土している。分布状況では遺跡範囲内の表土や耕作地に広く散布する。遺物は基本層序の第Ⅱ層灰黄褐色層や、第Ⅲ層の黒褐色粘質土層から出土し、平成3年度に実施した遺跡詳細分布調査でも遺跡範囲として確認された東西約700m、南北約780mの範囲に多く散布している。特に遺跡南西部や、南東部に集中した出土が認められ、調査区域の設定も2箇所に限定した。

2 挖立柱建物跡出土遺物（第16図、図版15、表2）

5棟の建物跡の柱根掘り方埋土内や建物内柱穴、建物周辺柱穴からは第16図に示した遺物が出土している。SB1建物跡のEB45柱穴からは2の赤焼土器壺片が出土、内外面に刷毛目が施される。14は内黒土器壺の底部片であり、EB231柱穴より出土した。内面をヘラミガキの後、黒色化を施している。SB1建物跡内のEP251柱穴からは8の須恵器壺が出土している。身が低く内外面にロクロ痕を施し、底部はヘラによる切り離しである。また、SB1建物跡付近のEP63柱穴からは3の赤焼土器壺片、EP105柱穴からは4の内黒土器高台付壺が出土している。3の壺は内外面共にロクロ痕を明瞭に施し、口唇が外反する。4は内面をヘラミガキの後、黒色化となる。SB2建物跡の柱穴からは土器の出土は認められなかったものの、SB2建物跡とSB3建物跡の重複範囲内のEP159柱穴から赤焼土器壺が出土している。また、この範囲内からは17の砥石が検出された。大型で建物内に置かれたものと考えられる。SB4建物跡の柱穴からは土器の出土は認められなかった。SB5建物跡のEB850柱穴からは15の赤焼土器壺と、16の赤焼土器壺下部が出土し、EB854柱穴からは13の内黒土器壺が出土した。13は、外面にロクロ痕を残し、内面はヘラミガキの後、黒色化となる。13・15・16の底部は回転糸切りによる切り離しが施されている。また、SB5建物跡付近に位置するEP764柱穴からは、9・10・11の赤焼土器が出土した。いずれも底部には回転糸切りが施されている。これらの出土遺物から、SB1～5建物跡が営まれた時期は10世紀と推測される。

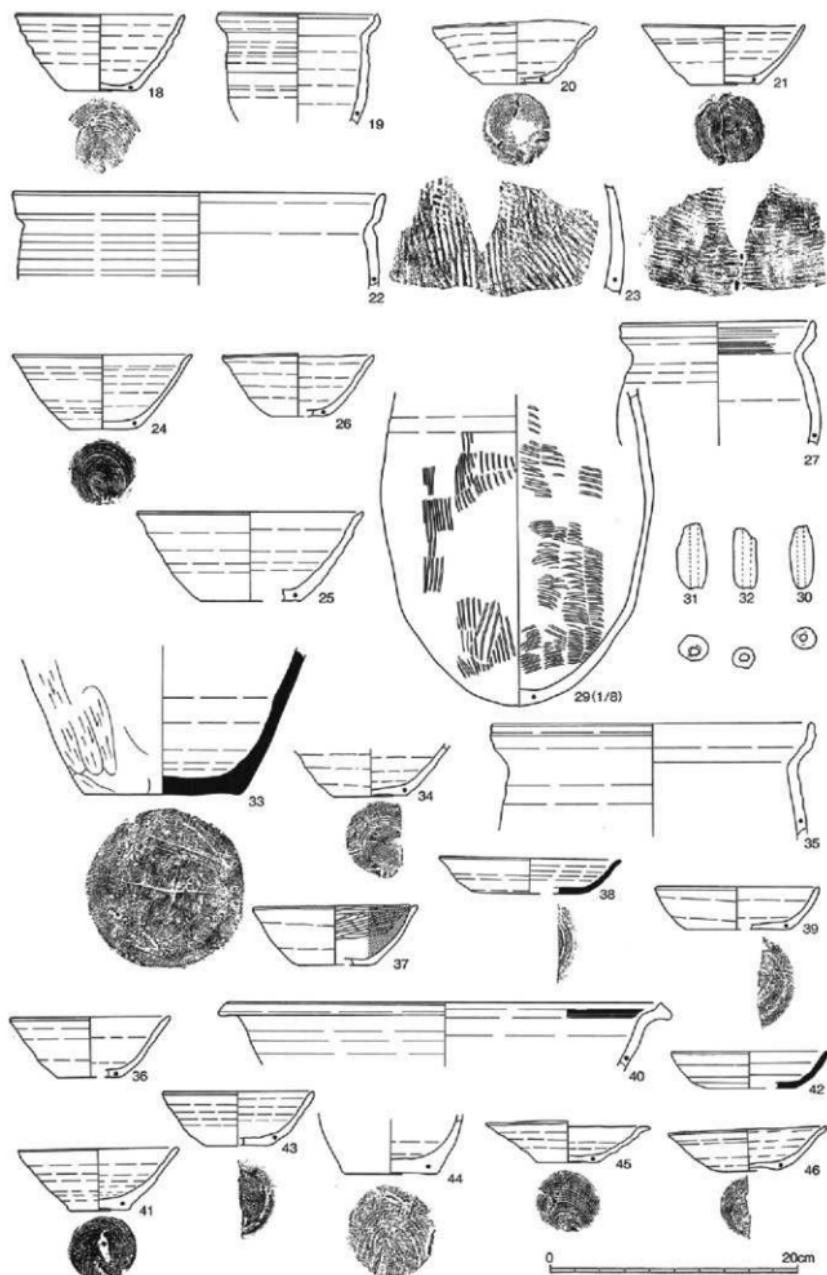
3 土坑内出土遺物（第17～19図、図版15～18、表2・3）

調査で確認された土坑はA区で47基、B区で32基の計79基を数える。各土坑からは土師器・須恵器・内黒土器・赤焼土器・製塙土器・石製品・土製品が出土した。器種では、共膽形態の壺・皿・高台付壺・煮沸形態の壺・鍋・貯蔵形態



第16図 建物跡出土遺物

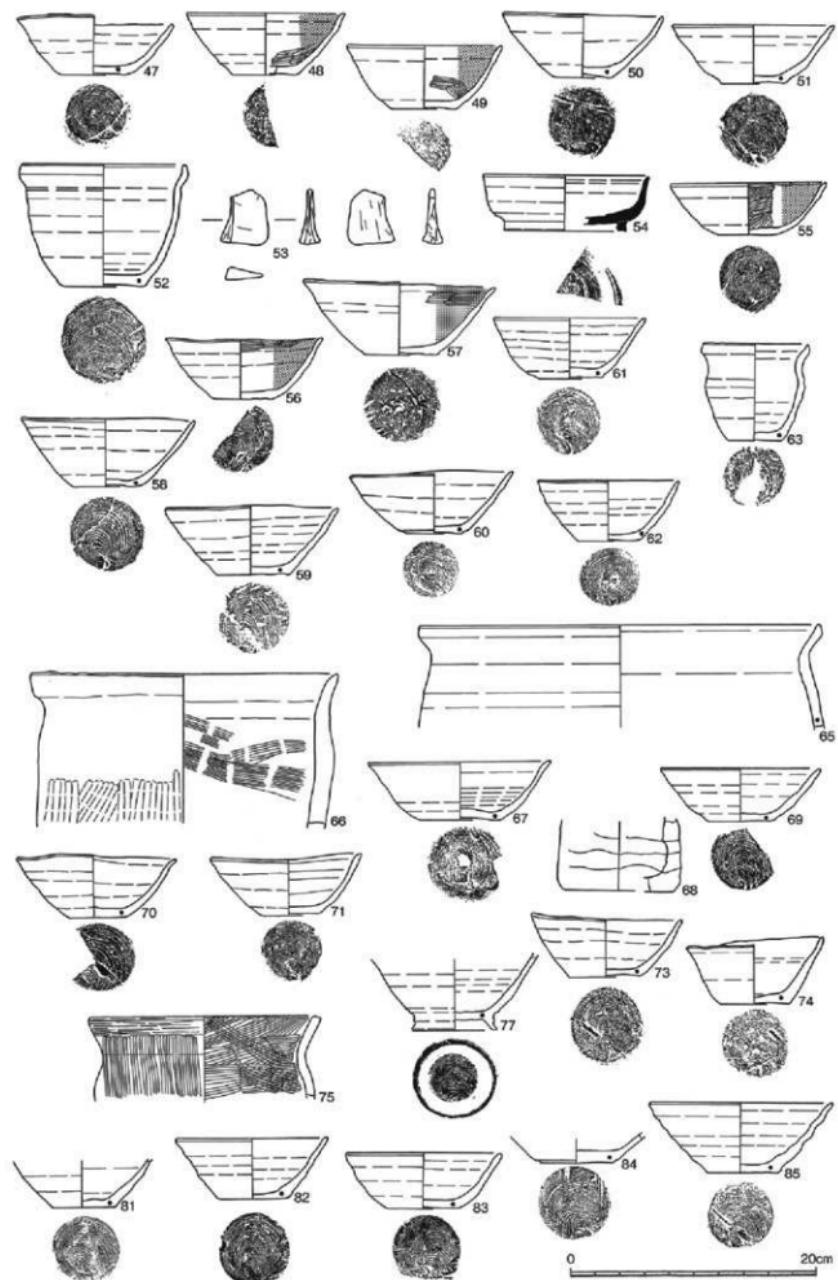
の壺等である。ここでは土坑内出土遺物のなかで、土坑が営まれた時期や性格等を示す遺物を第17・18図に示した。中でもSK46土坑の覆土2層が黒褐色砂質土層で、白色火山灰がブロック状と、炭化物粒子を含む埋め土となり、出土した赤焼土器坏（第18図70）が火山灰を降灰した時期に近接すると考える。図示した遺物では、SK22土坑からは第17図18・19・22の赤焼土器が出土している。18は壺形土器で器面にロクロ痕を残し、底部は回転糸切り離してある。身が高く、体部がやや膨らみ、口唇が直立する。口径が140mmとやや大振りである。19・22は壺片である。19は小振りの土器で口唇が内傾するが、22は口唇が立ち上がる。SK23～25・28・31・32・37～41・44・46・48・50・66・70・72・75・525・527・533・549・721土坑からの出土遺物を図示したが、土器の観察では出土した遺物の形状や製作法が同様である。第18図の68は製塙土器である。SK44土坑からの出土で、底径が90mmの小形の土器である。粗砂を含む太さ10mmの粘土紐を巻き上げている。内部は搔きあげた痕跡を残す。75はSK



第17図 土坑内出土遺物(1)

表2 出土遺物観察表(1) 建物跡・土坑

擇因 番号	器種	計測値 (mm)		胎土	色調	調整技法	出土地点		
		口径	底径						
第 四 回	1 裸	—	—	粗砂混	にぶい黄橙 10YR6/3	外面 条線状叩き アテ	SB3 EB113		
	2 赤燒	裸	—	粗砂混	にぶい黄橙 7.5YR6/4	内 外面 ハケ目	SB1 EB45		
	3 坯	166	—	粗砂混	にぶい黄橙 10YR7/4	ロクロ痕	EP63		
	4 内 黒	高台坯	145	62	57	鐵 密 灰 白 10YR8/2	ヘラミガキ→黒色化	EP105	
	5 裸	—	82	粗砂混	明黄褐 10YR6/6	外面 ハケ目	SB3 EB113		
	6 赤燒	高台坯	—	—	鐵 密	にぶい橙 7.5YR7/4	ロクロ痕	SB3 EB158	
	7 坯	138	—	粗砂混	橙 7.5YR7/6	ロクロナデ	SB2-3 EP159		
	8 須恵器	坯	127	70	31	鐵 密 灰 白 10YR7/1	ヘラ切り	SB1 EP251	
	9 坯	135	52	51	粗砂混	にぶい橙 7.5YR7/4	回転糸切り ロクロナデ	EP764F ₂	
	10 赤燒	坯	124	50	51	粗砂混	にぶい橙 7.5YR7/3	回転糸切り ロクロナデ	EP764F ₁
	11 坯	122	50	49.5	粗砂混	明褐 7.5YR7/2	回転糸切り ロクロナデ	EP764	
	12 須恵器	裸	—	—	鐵 密 橙 灰	10YR5/1	外面 格子目状叩き 内面 青海波アテ痕	SB1 EB114	
	13 内 黒	坯	146	59	62	鐵 密	にぶい黄橙 10YR7/2	回転糸切り ヘラミガキ→黒色化	SB5 EB854
	14 坯	—	57	—	細砂混	にぶい黄橙 10YR7/2	ヘラミガキ→黒色化	SB1 EB231	
	15 赤燒	坯	146	62	53.5	粗砂混	にぶい黄橙 10YR7/2	回転糸切り ロクロナデ	SB5 EB850
	16 裸	—	104	—	粗砂混	にぶい橙 5YR7/4	回転糸切り ロクロナデ	SB5 EB850	
	17 石製品	砥石	—	—	—	褐色 灰 7.5YR6/1		SB2-3	
第 五 回	18 坯	140	60	62	粗砂混	にぶい橙 5YR7/3	回転糸切り ロクロナデ	SK22	
	19 裸	130	—	87	粗砂混	にぶい黄橙 10YR7/4	ロクロ痕	SK22	
	20 坯	135	53	51.5	粗砂混	にぶい橙 7.5YR7/4	回転糸切り ロクロナデ	SK23	
	21 坯	135	57	48	細砂混	にぶい橙 5YR7/4	回転糸切り ロクロナデ	SK23	
	22 裸	304	—	—	粗砂混	にぶい橙 7.5YR7/4	ロクロ痕	SK22	
	23 赤燒	—	—	—	粗砂混	にぶい橙 10YR7/3	外面 条線状叩き 内面 条線状アテ	SK23	
	24 坯	148	55	60	細砂混	橙 5YR7/6	回転糸切り ロクロナデ	SK23	
	25 坯	184	80	72	粗砂混	橙 5YR7/8	回転糸切り ロクロナデ	SK24	
	26 坯	126	44	49	粗砂混	にぶい橙 5YR7/4	回転糸切り ロクロナデ	SK24	
	27 裸	158	—	100	粗砂混	にぶい橙 7.5YR7/4	ロクロ痕	SK24	
	29 裸	—	—	—	細砂混	にぶい橙 5YR7/3	外面 条線状叩き 内面 条線状アテ	SK24	
	30 土製品	土鍋	長さ 51	径 20	粗砂混	にぶい黄橙 10YR7/3		SK24F ₁	
	31 土製品	土鍋	長さ 53	径 23	粗砂混	にぶい黄橙 10YR7/2		SK521F ₁	
	32 土鍋	長さ 49	径 18	粗砂混	灰黃褐 10YR6/2		SK521F ₁		
	33 須恵器	裸	—	—	鐵 密	褐 灰 10YR6/1	外面 ヘラケズリ→布ナデ 内面 ヘラミガキ	SK25	
	34 坯	—	60	38	粗砂混	にぶい橙 7.5YR7/4	回転糸切り ロクロナデ	SK25	
	35 赤燒	裸	262	—	91	粗砂混	橙 7.5YR7/6	ロクロ痕	SK25
	36 坯	132	54	48	粗砂混	にぶい橙 5YR6/3	回転糸切り ロクロナデ	SK28	
	37 内 黒	坯	136	64	48	粗砂混	にぶい橙 7.5YR7/3	回転糸切り ロクロナデ 横條のヘラミガキ	SK29F ₁
	38 須恵器	坯	148	70	29	鐵 密 褐 灰 10YR6/1	ロクロナデ	SK31	
	39 裸	134	82	35	粗砂混	にぶい褐 7.5YR6/3	ヘラ切り 運元焼成による	SK31	
	40 赤燒	堀	374	—	—	粗砂混 橙 7.5YR7/6	ロクロ痕	SK31	
	41 坯	—	75	—	粗砂混	橙 7.5YR7/6	回転糸切り	SK31	
	42 須恵器	坯	130	70	30	細砂混 灰 白 10YR7/1	ロクロ痕	SK32	
	43 赤燒	坯	124	50	45	粗砂混 灰 白 10YR8/1	回転糸切り ロクロナデ	SK37	
	44 赤燒	坯	130	52	51	粗砂混 にぶい橙 7.5YR7/3	回転糸切り ロクロナデ	SK37	
	45 裸	—	136	50	35	細砂混 にぶい橙 7.5YR7/4	回転糸切り ロクロナデ	SK38	
	46 裸	—	130	46	34	粗砂混 明褐灰 7.5YR7/2	回転糸切り ロクロナデ	SK38	
■■■	47 赤燒	坯	128	50	47	粗砂混 にぶい橙 7.5YR7/4	回転糸切り ロクロナデ	SK38	



第18図 土坑内出土遺物(2)

66 土坑底面から出土の土師器の壺片である。全面にヘラケズリやヘラナデ根を残し、時期は8世紀第4四半期と推測する。遺跡から確認した土坑のなかではS K 66 土坑が古い形態を示すが、そのほかの土坑は、火山灰の降灰期である10世紀第1四半期と確認できる。

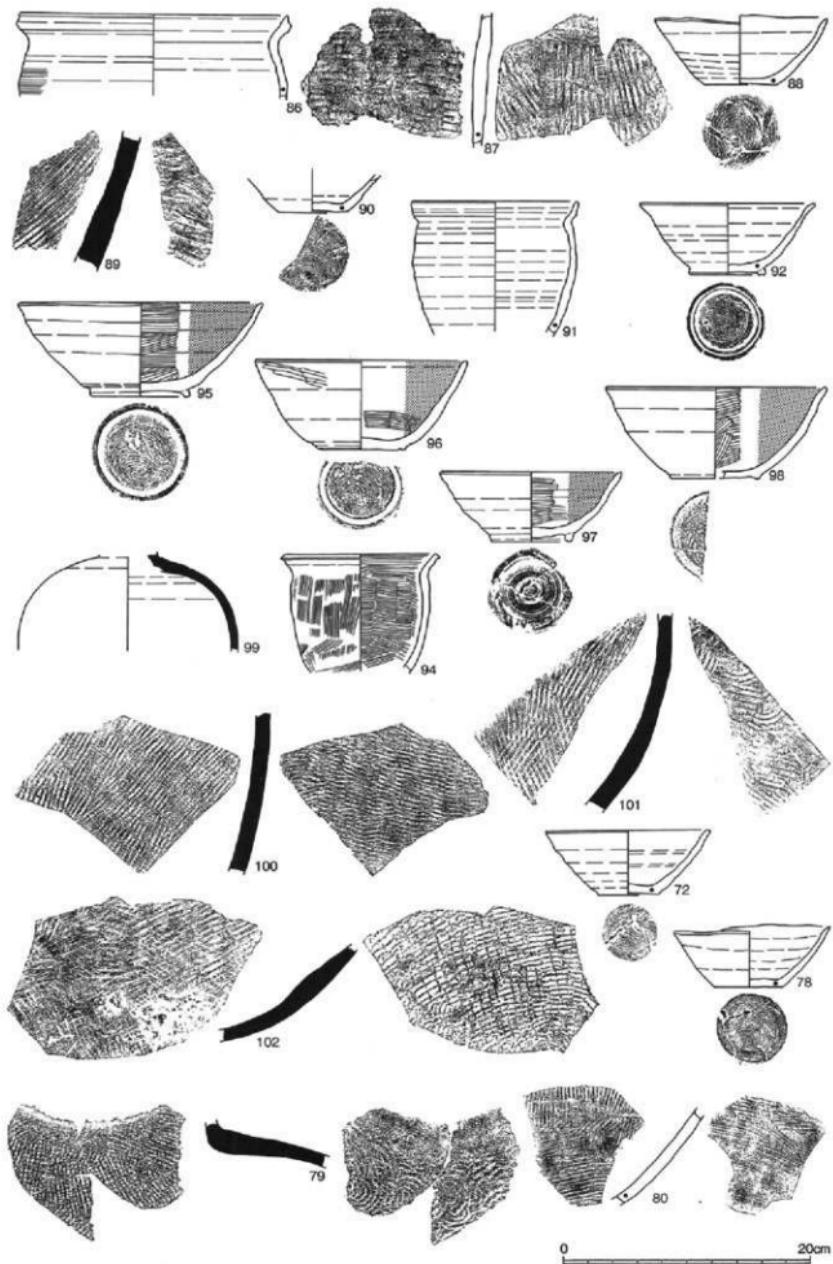
4 溝状遺構出土遺物（第19～21図、図版18～22、表3～5）

調査では21条の溝跡を図示した。溝跡はやや南北に走る溝状遺構が多いが、B区では東西に走る溝状遺構が多く検出されている。これはある程度の遺構の性格や、時期等に反映しているものと考え、南北方向を持つ溝跡を中心に示し説明する。A区では数条の溝跡が確認されている。ここでは調査区南部で確認されたSD67溝跡を代表にし、他は調査で出土した遺物のみを図示し、説明を割愛した。

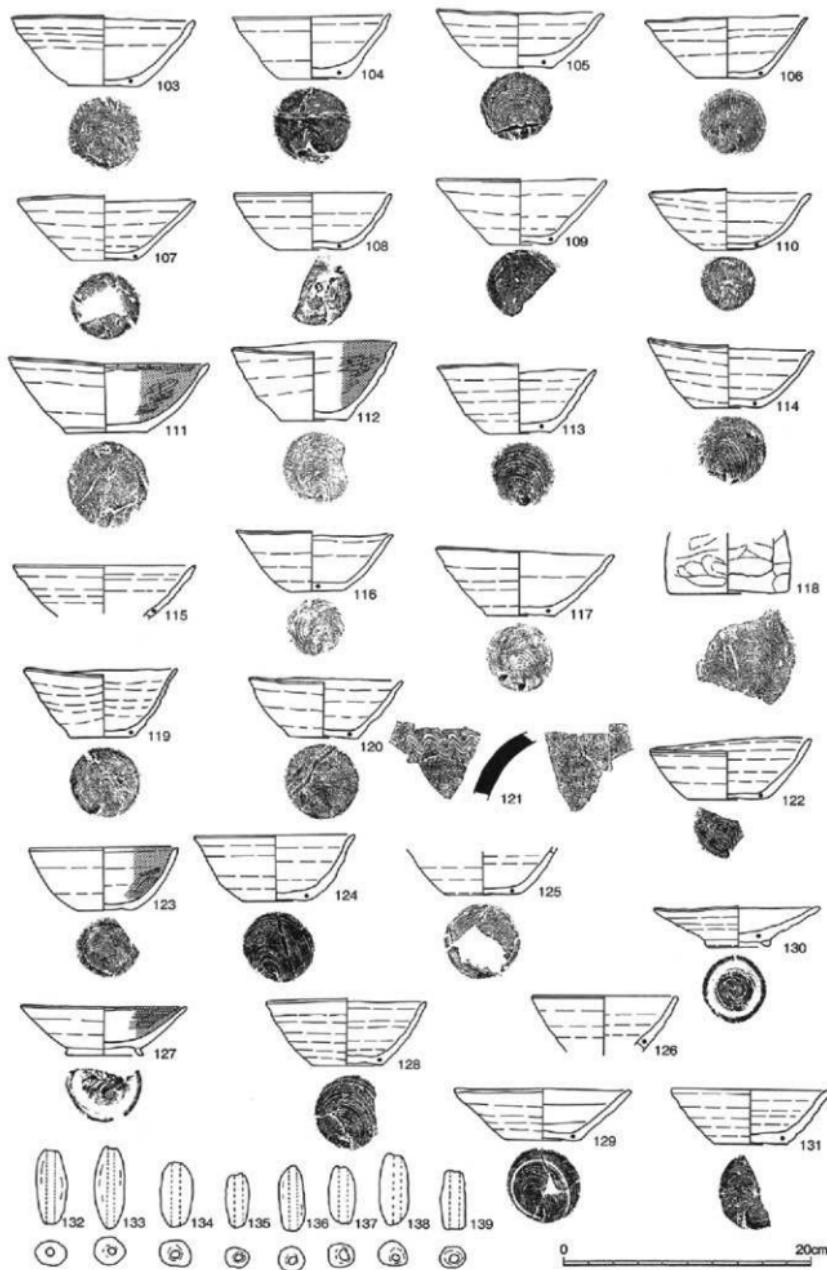
SD67溝跡はやや南北に走り、A区で検出された建物跡の主軸方向とその向きを同じとしている。断面形はU字状となり、覆土2層には灰色の火山灰が厚さ6～10cmに堆積し、第19図94から第20図118までの土器が出土している。火山灰は降灰したのち降雨によって溝内に流入したと考える。出土した土器は、土師器、須恵器、内黒土器、赤焼土器、製塩土器で、器種は壺、坏、高台付坏、壺である。94は土師器の壺片である。口径13cm、底部は欠損しているが器高10cmの小形の土器である。器全面に刷毛目による器面調整を施している。赤焼土器では第20図の坏形土器（103～110・113～117）がある。器形では歪なものが多く、底径が小さく、体部が丸くなるもの（108・110・114）が観察される。また、器高は43～64mmで、直線的に立ち上がるもの（109・113）や、大きく外反する器形がある。内黒土器は第19図95～98、第20図111・112を図示した。器形では、口径が広く、器も厚く、しっかりとした成形である。ロクロ痕を示し、器内部をヘラケズリ後、黒色化を施している。底部の切り離しは95・96・98・111・112が回転糸切りであり、97は回転ヘラ切りである。器は高台が付くもの（95・97）と高台が付かないもの（111・112）が観察される。須恵器では99の壺体部と、100～102の壺片である。99は体部が丸くなり、ロクロ面を残す。壺片の内面は条線状のアテ痕（100）、同心状のアテ痕（101）、格子目状のアテ痕（102）が施される。外面は条線条のタタキが施される。溝状遺構内からの出土土器はSD67溝跡からの出土土器の成形法と変わらず、時期は10世紀第1四半期と推測する。

5 旧河川跡出土遺物（第22図、図版22、表5）

A区北半部に確認された幅約20～28mの河川が埋没した跡である。圃場整備事業という開発行為が原因の発掘調査であり、河川跡を大きく掘り下げることは事業完成後に耕作作業に支障をきたすことから、面での範囲の確認のみとし、南部となる左岸に幅1m、長さ5～10mのトレンチを設置し、岸辺を掘り下げた。



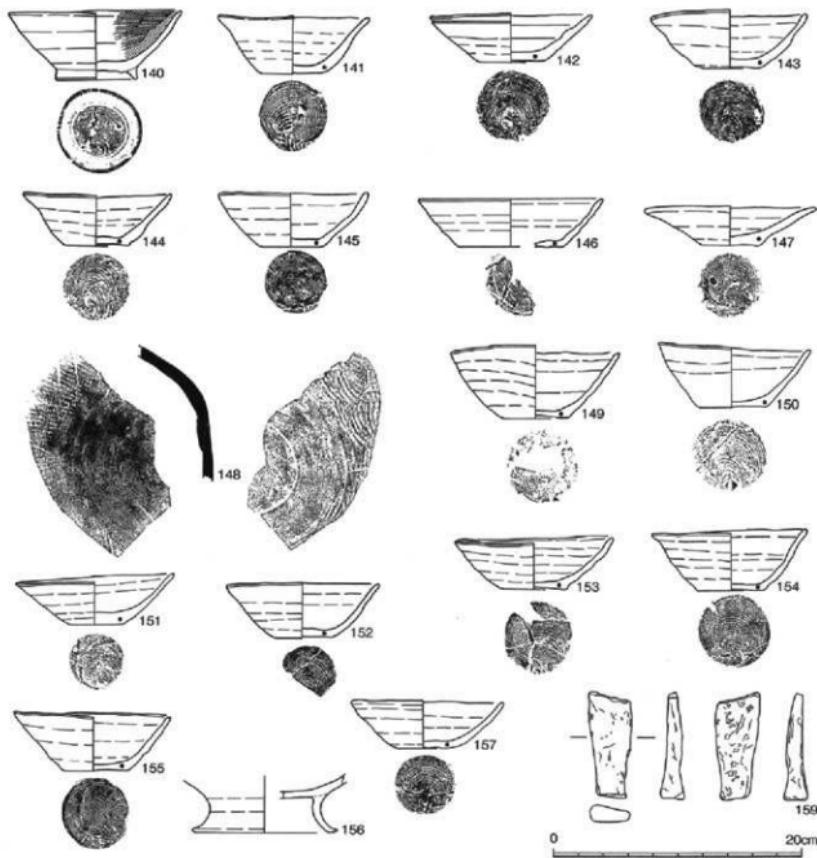
第19図 土坑内出土遺物(3)、溝状遺構出土遺物(1)



第20図 溝状遺構出土遺物(2)

表3 出土遺物観察表(2) 土坑・溝状遺構

探査番号	器種	計測値 (mm)			胎土	色調	調整技法	出土地点	
		口径	底径	器高					
第55	内 黒 壺	130	54	48	粗砂混	にぶい橙	7.5YR7/3	回転糸切り ヘラミガキ→黒色化	SK39
	内 黒 壺	124	50	60	粗砂混	にぶい橙	5YR7/3	回転糸切り ヘラミガキ→黒色化	SK39
	赤 燃 壺	133	48	50	粗砂混	にぶい橙	5YR7/3	回転糸切り ヘラミガキ→黒色化	SK39
	赤 燃 壺	133	54	47	粗砂混	黒	10YR1.7/1	回転糸切り ヘラミガキ→黒色化	SK39
	赤 燃 壺	135	70	98	粗砂混	にぶい橙	7.5YR7/3	回転糸切り ヘラミガキ→黒色化	SK41
	石製品 瓦	—	—	—	粗砂混	にぶい黄橙	10YR7/2		SK39
	須恵器 高台壺	134	100	45	細砂混	褐 灰	10YR6/1	ロクロナデ	SK40
	内 黒 壺	127	50	42	細砂混	にぶい黄橙	10YR7/2	回転糸切り ヘラミガキ→黒色化	SK41
	内 黒 壺	128	47	51	細砂混	灰 白	10YR8/1	回転糸切り ヘラミガキ→黒色化	SK41
	内 黒 壺	157	60	58	粗砂混	灰 白	10YR8/1	回転糸切り ヘラミガキ→黒色化	SK41
第56	赤 燃 壺	142	52	57	粗砂混	橙	5YR7/6	回転糸切り ロクロナデ	SK41
	赤 燃 壺	141	54	58	粗砂混	橙	5YR7/6	回転糸切り ロクロナデ	SK41
	赤 燃 壺	130	46	49	粗砂混	にぶい橙	5YR7/3	回転糸切り ロクロナデ	SK41
	赤 燃 壺	124	52	49	粗砂混	淡 橙	5YR8/3	回転糸切り ロクロナデ	SK41
	赤 燃 壺	116	50	49.5	粗砂混	にぶい橙	7.5YR7/4	回転糸切り ロクロナデ	SK41
	赤 燃 壺	87	46	80	粗砂混	にぶい黄橙	10YR7/3	ロクロ痕	SK41
	赤 燃 壺	328	—	—	粗砂混	橙	5YR6/6	ロクロ痕	SK44
	土師器 壺	250	—	—	粗砂混	橙	5YR6/6	外面 条線状叩き 内面 ハケ目	SK42
	赤 燃 壺	150	64	47	粗砂混	灰 白	5YR8/2	回転糸切り ロクロナデ	SK42
	赤 燃 壺	—	90	—	粗砂混	にぶい赤橙	5YR5/4		SK44
第57	赤 燃 壺	132	54	43.5	粗砂混	橙	7.5YR7/6	回転糸切り	SK44
	赤 燃 壺	131	49	51	粗砂混	にぶい橙	7.5YR7/3	回転糸切り ロクロナデ	SK46
	赤 燃 壺	123	46	49	粗砂混	浅黄橙	7.5YR8/4	回転糸切り ロクロナデ	SK48
	赤 燃 壺	134	48	52	粗砂混	にぶい橙	7.5YR7/3	回転糸切り ロクロナデ	SK48
	赤 燃 壺	123	57	52	粗砂混	橙	5YR7/6	回転糸切り ロクロナデ	SK48
	赤 燃 壺	114	56	55	粗砂混	にぶい橙	5YR7/4	回転糸切り ロクロナデ	SK50
	土師器 壺	190	—	—	細砂混	黒	7.5YR1.7/1	回転糸切り ロクロナデ	SK66Y
	赤 燃 壺	高台壺	—	69	粗砂混	にぶい橙	7.5YR7/4	回転糸切り ロクロナデ	SK70
	赤 燃 壺	128	56	50	細砂混	浅黄橙	7.5YR8/3	回転糸切り ロクロナデ	SK75
	須恵器 壺	—	—	—	粗砂混	灰	10YR5/1	外面 条線状叩き 内面 青海波アテ痕	SK72
第58	赤 燃 壺	壺	—	—	細砂混	褐 灰	10YR6/1	外面 格子目叩き 内面 タタキ ヘラナデ	SK72
	赤 燃 壺	100	52	37	粗砂混	にぶい橙	7.5YR7/3	回転糸切り ロクロナデ	SK25F ₆
	赤 燃 壺	124	60	49	粗砂混	にぶい橙	7.5YR7/4	回転糸切り ロクロナデ	SK527
	赤 燃 壺	128	60	45	粗砂混	にぶい橙	7.5YR7/4	回転糸切り ロクロナデ	SK533F ₂
	赤 燃 壺	—	60	—	粗砂混	にぶい黄橙	7.5YR7/4	回転糸切り ロクロナデ	SK549F ₂
	赤 燃 壺	150	54	59	粗砂混	橙	7.5YR7/6	回転糸切り ロクロナデ	SK721
	赤 燃 壺	220	—	—	粗砂混	にぶい橙	7.5YR7/4	ロクロ痕	SK41F ₁
	赤 燃 壺	—	—	—	粗砂混	にぶい黄橙	10YR4/3	外面 条線状叩き 内面 条線状アテ	SK41F ₁
	赤 燃 壺	142	59	55	粗砂混	にぶい橙	7.5YR7/3	回転糸切り ロクロナデ	SD59F ₁
	須恵器 壺	—	—	—	粗砂混	灰	10Y5/1	外面 格子目叩き 内面 条線状アテ	SD47F ₁
第59	赤 燃 壺	—	—	—	細砂混	橙	5YR7/6	回転糸切り ロクロナデ	SD59F ₁
	赤 燃 壺	136	—	—	粗砂混	にぶい橙	7.5YR7/4	ロクロナデ	SD64
	高台壺	144	64	58	細砂混	綠 灰	N5/1	回転糸切り	SD64F ₂
	土師器 壺	130	—	—	細砂混	橙	7.5YR6/6	内外面 ヘラナデ	SD67F ₁

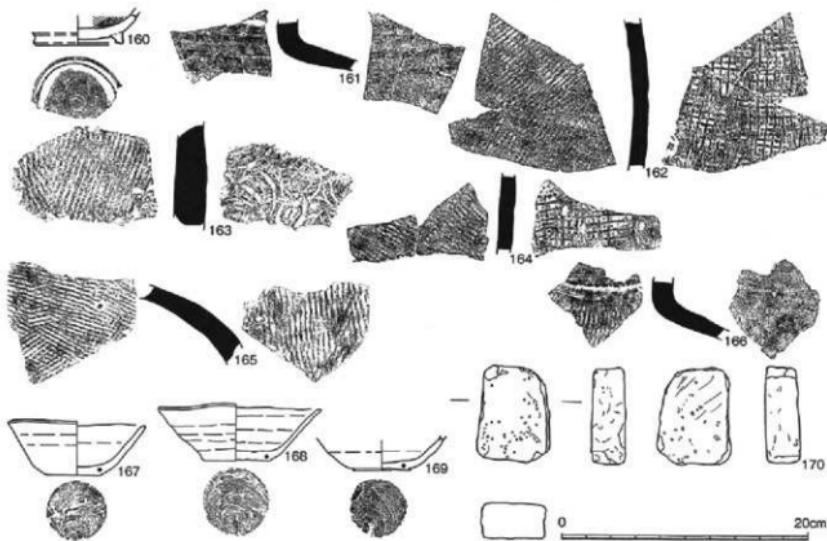


第21図 溝状遺構出土遺物(3)

調査では第22図に示した遺物が出土した。器種は内黒土器(160)、須恵器(161～166)、赤焼土器(167～169)、石製品(170)である。160は内黒土器の高台付壺で、底部部分の土器である。見込みを放射状にヘラミガキ後、黒色化を施している。底部の切り離しは回転ヘラケズリと観察されるが判然としない。高台は直立するが、高台底面は内側に曲がり、ヘラによるナデの線状の掘り込みが観察される。161～166は須恵器の甕片である。ロクロ痕を示す161以外は、外面に条線状のタタキ痕、内面に格子目状アテ痕(162・164)、青海波アテ痕(163)、条線状アテ痕(165)が施される。166は外面条線状タタキで、内面には灰かぶりが観察された。167～169は赤焼土器の壺形土器である。167・168は器形が歪となり、全面にロクロ痕が観察される。169は底部のみの土器である。底部の切

表4 出土遺物観察表(3) 溝状造構

擲出 番号	器種	計測値 (mm)		胎土	色調	調整技法	出土地点			
		口径	底径							
第95 96 97 98	内黒 内黒 高台坏 坏	200	80	78	粗砂混	にぶい黄橙 10YR7/2	回転糸切り ヘラミガキ→黒色化	SD67		
		172	72	53	粗砂混	にぶい黄橙 10YR7/3	回転糸切り ヘラミガキ→黒色化	SD67F		
		148	66	57.5	粗砂混	灰白 7.5YR8/2	回転ヘラ切り ヘラミガキ→黒色化	SD67		
		179	72	75	粗砂混	にぶい黄橙 10YR7/2	回転糸切り ヘラミガキ→黒色化	SD67		
19 99 100 101 102	須恵器 須恵器 須恵器 須恵器	—	—	—	鐵 錫 灰	N6/	ロクロ痕	SD67F ₁		
		—	—	—	鐵 錫 灰	10Y5/1	外面 格子目叩き 内面 条線状アテ	SD67F ₁		
		—	—	—	細砂混	暗灰 N3/	外面 格子目叩き 内面 同心状アテ	SD67F ₁		
		—	—	—	粗砂混	灰 N4/	外面 条線状叩き 内面 格子目アテ	SD67F ₁		
103 104 105 106 107 108 109 110 111 112	赤焼 赤焼 赤焼 赤焼 赤焼 赤焼 赤焼 赤焼 内黒 内黒	坏	149	58	59	粗砂混 橙	7.5YR6/8	回転糸切り ロクロナデ	SD67	
		坏	130	55	52	粗砂混 浅黄橙	7.5YR8/3	回転糸切り ロクロナデ	SD67F ₁	
		坏	137	58	48	粗砂混 浅黄橙	7.5YR8/4	回転糸切り ロクロナデ	SD67	
		坏	134	54	50	粗砂混 浅黄橙	7.5YR8/3	回転糸切り ロクロナデ	SD67	
		坏	1455	54	52	粗砂混 橙	5YR7/6	回転糸切り ロクロナデ	SD67F ₁	
		坏	130	59	46	粗砂混 淡橙	5YR8/3	回転糸切り ロクロナデ	SD67F	
		坏	1395	64	52.5	粗砂混 灰白	5YR8/2	回転糸切り ロクロナデ	SD67	
		坏	1225	44	49	粗砂混 橙	5YR7/6	回転糸切り ロクロナデ	SD67	
		坏	163	69	63	粗砂混 灰白	7.5YR8/2	回転糸切り ヘラミガキ→黒色化	SD67	
		坏	135	55	63	粗砂混 灰白	7.5YR8/2	回転糸切り ヘラミガキ→黒色化	SD67F	
113 114 115 116 117 118 119	赤焼 赤焼 赤焼 赤焼 赤焼 製塙土器 赤焼	坏	132	52	56	粗砂混 浅黄橙	7.5YR8/3	回転糸切り ロクロナデ	SD67	
		坏	136	55	57	粗砂混 浅黄橙	7.5YR8/3	回転糸切り ロクロナデ	SD67	
		坏	150	—	—	粗砂混 淡 橙	5YR8/4	ロクロナデ	SD67F ₁	
		坏	130	43	50	粗砂混 浅黄橙	7.5YR8/4	回転糸切り ロクロナデ	SD67F ₁	
		坏	146	57	56	粗砂混 淡 橙	5YR8/4	回転糸切り ロクロナデ	SD67	
		—	—	100	粗砂混 橙	5YR6/6	ヘラ切り	SD67F ₁		
		坏	125	55	50	粗砂混 浅黄橙	7.5YR8/3	回転糸切り ロクロナデ	SD73	
20 120 121 122 123 124 125 126 127 128	赤焼 赤焼 赤焼 赤焼 内黒 赤焼 赤焼 赤焼 内黒 赤焼	坏	136	58	47	粗砂混 浅黄橙	7.5YR8/4	回転糸切り ロクロナデ	SD73	
		坏	138	60	50.5	粗砂混 浅黄橙	7.5YR8/3	回転糸切り ロクロナデ	SD514F ₁	
		坏	122	48	50	粗砂混 灰白	7.5YR8/1	回転糸切り ヘラミガキ→黒色化	SD514F ₁	
		坏	124	58	48	粗砂混 浅黄橙	7.5YR8/3	回転糸切り ロクロナデ	SD514F ₁	
		坏	—	60	—	細砂混 にぶい橙	7.5YR7/3	回転糸切り ロクロナデ	SD515F ₁	
		坏	120	—	—	細砂混 淡 橙	5YR8/3	ロクロナデ	SD515F ₁	
		坏	138	62	41	細砂混 灰白	10YR8/1	ヘラミガキ→黒色化	SD516	
		坏	132	57.5	55	粗砂混 浅黄橙	7.5YR8/4	回転糸切り ロクロナデ	SD519F ₁	
		坏	140	60	39	細砂混 灰白	7.5YR8/2	ロクロナデ	SD520F ₁	
		高台坏	131	52	32	粗砂混 灰白	10YR8/2	ロクロ痕	SD520F ₁	
131 132 133 134 135 136 137 138 139	赤焼 土製品 土製品 土製品 土製品 土製品 土製品 土製品 土製品	坏	128	60	43.5	粗砂混 灰白	10YR8/2	ロクロナデ	SD520F ₁	
		土鍤	長さ 61	径 26	粗砂混	灰白	10YR7/1	SD520F ₁		
		土鍤	長さ 67	径 26	粗砂混	オリーブ黒	10YR4/1	SD520F ₂		
		土鍤	長さ 53	径 25	粗砂混	にぶい黄橙	10YR6/3	SD520F ₁		
		土鍤	長さ 45	径 18	粗砂混	褐 灰	10YR4/1	SD520F ₃		
		土鍤	長さ 54	径 22	粗砂混	にぶい黄橙	10YR7/3	SD521F ₁		
		土鍤	長さ 46	径 21	粗砂混	にぶい黄橙	10YR7/3	SD521F ₁		
		土鍤	長さ 59	径 23	粗砂混	灰	7.5YR6/1	SD536F ₁		
		土鍤	長さ 49	径 21	粗砂混	にぶい黄橙	10YR7/3	SD560F ₁		
		内黒	高台坏	142	67	56	粗砂混	にぶい黄橙 10YR7/3	回転糸切り ヘラミガキ→黒色化	SD530
21 141	赤焼	坏	124	56	47	粗砂混	橙	7.5YR7/6	回転糸切り ロクロナデ	SD530F ₁



第22図 旧河川跡出土遺物

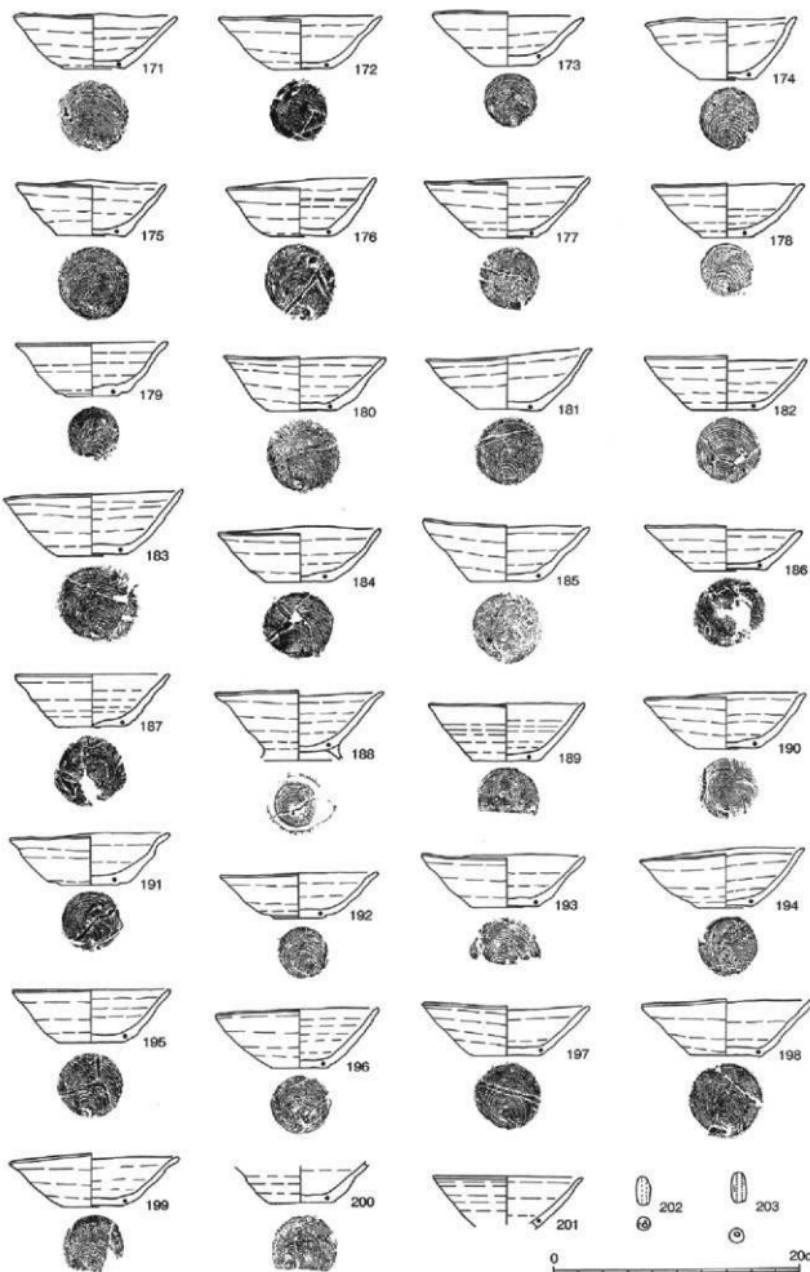
り離しは回転糸切り離しである。器形は体部がやや丸みをもつもの(167・169)と、大きく外に広がるもの(168)がある。170は砾石である。高さ8cm、幅6cm、厚さ3cmの完形品である。時期は10世紀第3四半世紀に推測される。

6 性格不明遺構出土遺物（第23図、図版22～24、表5・6）

B区南部調査区で確認された長辺約8m、短辺約7mのほぼ方形に検出した堅穴遺構である。S X 751遺構と命名し、覆土からは第23図に図示した赤焼土器と、土鍤が出土した。赤焼土器はほとんどが歪な成形を示し、体部にロクロ痕を明瞭に残し、丸みをもつものと、口縁が広がる器形が認められる。器高は4～6cmと低く、口唇が大きく外反するもの(179・191)、丸みをもつもの(174・178・181・184・190)が観察される。底部の切り離しはすべて回転糸切りを明瞭に示し、183は糸切りの跳ねた跡を残している。202・203は長さ約2cm、径約1cmの土鍤である。中心に径3mmの孔を施している。網に使用する鍤と推測する。これらは時期は10世紀第3四半期に推測する。

7 包含層出土遺物（第24図、図版24・25、表6）

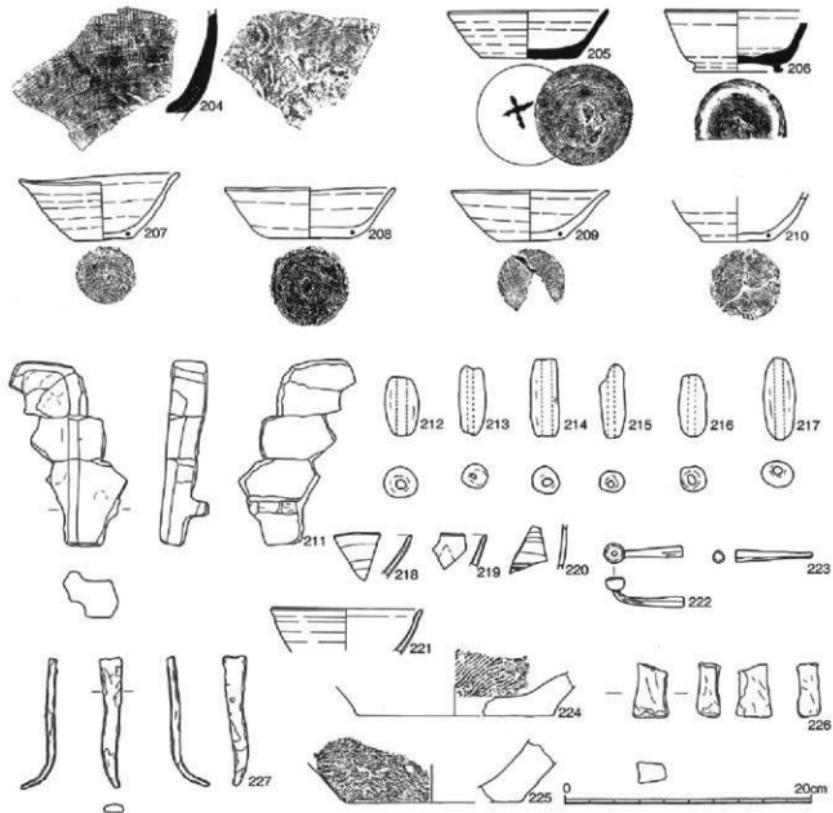
調査での遺跡から出土した遺物を第24図に図示した。器種は須恵器、赤焼土器、青磁、綠釉陶器、中世陶器、土製品、キセルの雁首、鉄製品である。204は、須恵器の横瓶片である。外面を格子目状のタタキ痕、内面を青海波アテ痕とヘラによる横ナデ痕が観察される。205は須恵器の壺である。底径が8cmと広く、



第23図 性格不明遺構出土遺物

表5 出土遺物観察表(4) 溝状遺構・性格不明遺構

排区 番号	器種	計測値 (mm)			胎 土	色 調	調整技法	出土地点		
		口径	底径	器高						
第 142	赤 燐	坏	133	58	38	粗砂混	浅黄橙	7.5YR8/3	回転糸切り ロクロナデ	SD530F ₁
		坏	127	45	47.5	粗砂混	にぶい橙	7.5YR7/4	回転糸切り ロクロナデ	SD530F ₁
		坏	128	54	44	粗砂混	にぶい橙	5YR7/4	回転糸切り ロクロナデ	SD530F ₁
		坏	124	50	43	粗砂混	橙	7.5YR7/6	回転糸切り ロクロナデ	SD530F ₁
		坏	148	88	48	細砂混	淡 橙	5YR8/3	回転糸切り ロクロナデ	SD537
		Ⅲ	140	50	32	細砂混	浅黄橙	7.5YR8/4	回転糸切り ロクロナデ	SD555F ₁
		須恵器	横 瓶	—	—	鐵 密	灰	10Y5/1	外面 呼き ハケ目 内面 青海波アテ 開栓部	SD558F ₁
21	赤 燐	坏	138	54	53	粗砂混	橙	7.5YR7/6	回転糸切り ロクロナデ	SD560F ₁
		坏	124	56	53	粗砂混	橙	7.5YR7/6	回転糸切り ロクロナデ	SD560F ₁
		坏	130	44	42	粗砂混	浅黄橙	10YR8/3	回転糸切り ロクロナデ	SD755F
		坏	125	48	44	細砂混	浅黄橙	10YR8/3	回転糸切り ロクロナデ	SD755
		坏	130	55	41	粗砂混	浅黄橙	10YR8/3	回転糸切り ロクロナデ	SD755F ₁
		坏	126	57	59	粗砂混	浅黄橙	7.5YR8/3	回転糸切り ロクロナデ	SD761F ₂
		坏	127	55	49	粗砂混	にぶい橙	7.5YR7/3	回転糸切り ロクロナデ	SD765F ₁
156	土 器	高 坏	—	116	—	細砂混	灰 白	7.5YR8/2	ヘラ彫影→帯ナデ	SD771
		坏	125	47	40	細砂混	浅黄橙	10YR8/3	回転糸切り ロクロナデ	SD771F ₁
157	赤 燐	坏	—	—	—	—	—	—	—	
		—	—	—	—	—	—	—	—	
159	石 製 品	砥 石	—	—	—	明黄褐	10YR6/6	—	SD772	
		—	—	—	—	—	—	—	—	
第 160	内 黒	高台坏	—	72	—	細砂混	にぶい黄橙	10YR7/3	ヘラミガキ→黒色化	SG21F ₁
		斐	—	—	—	細砂混	灰	7.5Y5/1	ロクロ板	SG21F ₁
		斐	—	—	—	細砂混	灰	7.5Y5/1	外面 条縞状叩き 内面 格子目状アテ	SG21F ₁
		斐	—	—	—	粗砂混	灰	10Y5/1	外面 条縞状叩き 内面 青海波アテ	SG21F ₁
		斐	—	—	—	粗砂混	灰	7.5Y7/1	外面 条縞状叩き 内面 格子目状アテ	SG21F ₁
		斐	—	—	—	粗砂混	灰	—	外面 条縞状叩き 内面 条縞状アテ	SG21F ₁
		斐	—	—	—	粗砂混	灰	7.5Y7/1	外面 条縞状叩き 内面 一部灰かぶり	SG21F ₁
22	須 恵 器	坏	113	49	46	細砂混	浅黄橙	10YR8/3	回転糸切り ロクロナデ	SG21F
		坏	135	55	47	粗砂混	灰 白	10YR8/2	回転糸切り ロクロナデ	SG21
		坏	—	46	24	細砂混	浅黄橙	10YR8/3	回転糸切り ロクロナデ	SG21F
170	石 製 品	砥 石	長80	幅60	厚30	—	橙	7.5YR6/8	—	SG21
		—	—	—	—	—	—	—	—	
第 171	赤 燐	坏	134	46	42	細砂混	浅黄橙	7.5YR8/4	回転糸切り ロクロナデ	SX751F ₂
		坏	135	54	44	細砂混	浅黄橙	7.5YR8/3	回転糸切り ロクロナデ	SX751F ₁
		坏	125	44	45	粗砂混	橙	7.5YR7/6	回転糸切り ロクロナデ	SX751F ₃
		坏	124	58	50	粗砂混	淡 橙	5YR8/4	回転糸切り ロクロナデ	SX751F ₂
		坏	124	58	41	粗砂混	浅黄橙	10YR8/3	回転糸切り ロクロナデ	SX751F ₃
		坏	131	60	47	粗砂混	浅黄橙	7.5YR8/3	回転糸切り ロクロナデ	SX751F ₂
		坏	133	47	46.5	粗砂混	にぶい橙	7.5YR7/4	回転糸切り ロクロナデ	SX751F ₂
		坏	125	43	43	粗砂混	橙	7.5YR7/6	回転糸切り ロクロナデ	SX751F ₃
		坏	124	44	43	粗砂混	浅黄橙	7.5YR8/3	回転糸切り ロクロナデ	SX751F ₁
		坏	133	57	48	粗砂混	にぶい橙	5YR7/4	回転糸切り ロクロナデ	SX751F ₂
		坏	134	52	50	粗砂混	灰 白	5YR8/2	回転糸切り ロクロナデ	SX751F ₃
		坏	131	50	40	粗砂混	にぶい橙	7.5YR7/4	回転糸切り ロクロナデ	SX751F ₃
		坏	128	60	48.5	粗砂混	灰 白	7.5YR8/2	回転糸切り ロクロナデ	SX751F ₂
		坏	134	53	42	粗砂混	浅黄橙	7.5YR8/3	回転糸切り ロクロナデ	SX751F ₃
		坏	137	55	46	粗砂混	にぶい黄橙	10YR7/4	回転糸切り ロクロナデ	SX751F ₃
		坏	129	60	36.5	粗砂混	浅黄橙	7.5YR8/3	回転糸切り ロクロナデ	SX751F ₂
		坏	126	60	42.5	細砂混	淡 橙	5YR8/4	回転糸切り ロクロナデ	SX751F ₃
		高台坏	138	65	55	粗砂混	にぶい黄橙	10YR7/3	回転糸切り ロクロナデ	SX751F ₃



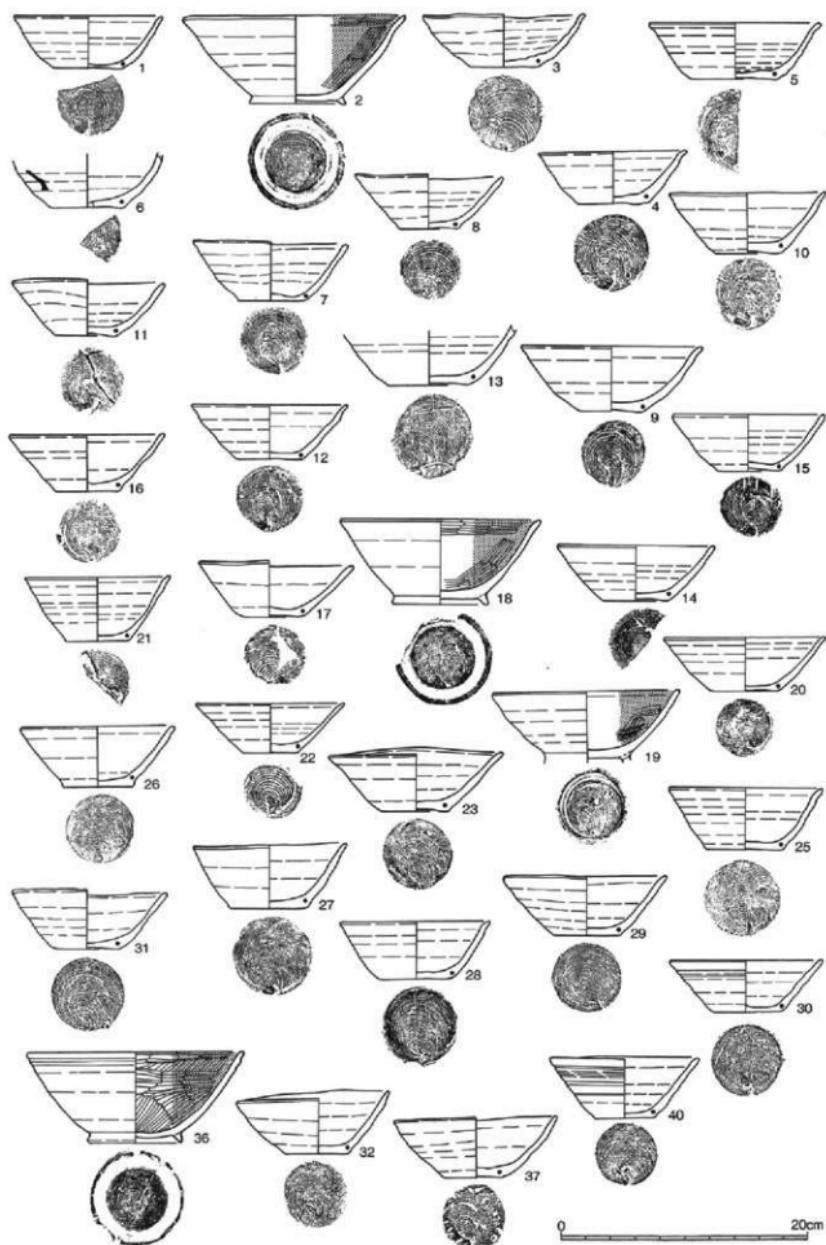
第24図 包含層出土遺物

口径が13cmとなり、対比率が3対2となる。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。底部に「十」字の墨書が描かれている。207～210は赤焼土器である。208はヘラ切りで、他は糸切り離しである。211は須恵器の二面鏡である。218・219・221は青磁である。碗形の破片である。224・225は中世陶器の擂鉢で、珠洲焼である。他に、砥石、釘、古錢が出土している。

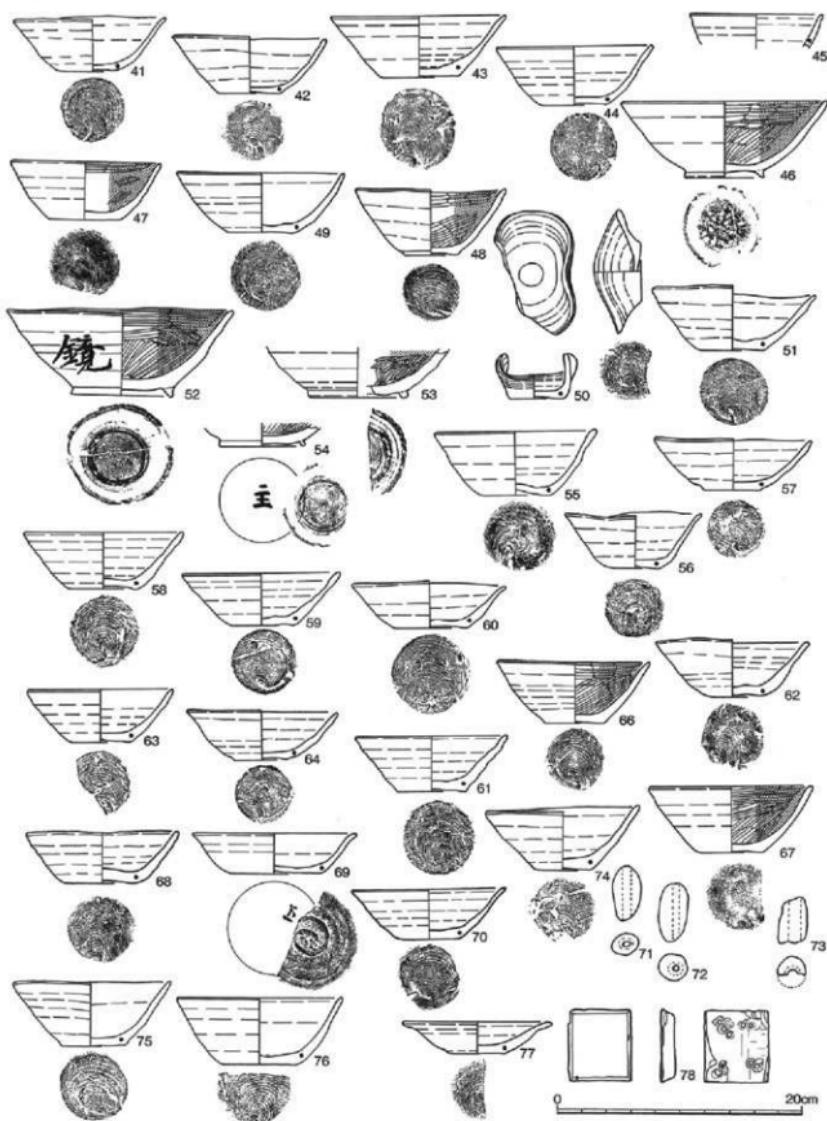
第25・26図では、調査開始以前の遺跡詳細分布調査出土の遺物を図示したが、ここでは説明を割愛する。

表6 出土遺物観察表(5) 性格不明造構・包含層

排団 番号	器種	計測値 (%)			色調	調整技法	出土地点	
		口径	底径	器高				
第 189	赤 燐	坏	128	52	46.5	細砂混 淡 橙	5YR8/4 回転糸切り ロクロナデ	SX751F ₂
		坏	132	50	38.5	粗砂混 灰 白	7.5YR8/2 回転糸切り ロクロナデ	SX751F ₂
		坏	131	48	40	粗砂混 淡 橙	5YR8/4 回転糸切り ロクロナデ	SX751F ₂
		坏	129	42	37	粗砂混 灰 白	5YR8/2 回転糸切り ロクロナデ	SX751F ₂
		坏	133	58	45	粗砂混 にぶい 橙	5YR7/4 回転糸切り ロクロナデ	SX751F ₂
		坏	135	47	46	粗砂混 にぶい 橙	7.5YR6/4 回転糸切り ロクロナデ	SX751F ₂
		坏	130	54	42	粗砂混 にぶい 橙	5YR7/4 回転糸切り ロクロナデ	SX751F ₂
		坏	133	49	46.5	粗砂混 にぶい 橙	5YR7/3 回転糸切り ロクロナデ	SX751F ₂
		坏	137	54	45	粗砂混 橙	5YR6/6 回転糸切り ロクロナデ	SX751F ₂
		坏	140	58	45	粗砂混 にぶい 黄橙	10YR6/3 回転糸切り ロクロナデ	SX751F ₂
図 199	200	坏	139	48	44	細砂混 にぶい 橙	7.5YR7/4 回転糸切り ロクロナデ	SX751F ₂
		坏	—	54	—	粗砂混 橙	5YR7/6 回転糸切り ロクロナデ	SX751F ₂
		坏	112	—	—	粗砂混 淡 橙	5YR8/3 回転糸切り ロクロナデ	SX751F ₂
		土 鍾	長さ 23 径 11	—	—	細砂混 黒 線	5YR7/1	SX751F ₂
202	土 製 品	土 鍾	長さ 25 径 12	—	—	粗砂混 にぶい 黄橙	10YR7/3	SX751F ₂
		横 瓢	—	—	—	鐵 密 黒	10YR17/1 外面 星子目状押捺 内面 著深成ア字直 ヘラ横子テ直	19-17 II
第 204	頬 恵 器	坏	131	81	41	鐵 密 接 灰	10YR6/1 回転ヘラ切り ロクロ痕 底部墨書き「十」	M6-35
		高台坏	120	72	50	粗砂混 灰	10Y5/1 ロクロ痕	57-31 II
		坏	133	48	50.5	粗砂混 にぶい 橙	7.5YR7/4 回転糸切り ロクロナデ	51-39 II
		坏	140.5	60	41	粗砂混 淡 橙	5YR8/3 ヘラ切り ロクロナデ	56-35
		坏	128.5	51.5	41	粗砂混 にぶい 黄橙	10YR7/3 回転糸切り ロクロナデ	23-14 III
		坏	—	60	36	粗砂混 橙	7.5YR7/6 回転糸切り ロクロナデ	55-33 III
		二面鏡	長151 幅1 厚40	—	—	細砂混 灰	10YR5/1	52-30 II
		土 鍾	長さ 48 径 27	—	—	粗砂混 明黄褐	10YR7/6	R1969 19-14
		土 鍾	長 56 径 21	—	—	粗砂混 にぶい 黄橙	10YR7/3	19-15 II
		土 鍾	長さ 63 径 23	—	—	粗砂混 浅黄橙	10YR8/4	20-13 II
図 216	土 製 品	土 鍾	長さ 59 径 20.5	—	—	粗砂混 浅黄橙	10YR8/4	24-8 III
		土 鍾	長さ 50 径 22	—	—	粗砂混 にぶい 黄橙	10YR7/3	53-31 II
		土 鍾	長さ 67 径 26	—	—	粗砂混 にぶい 黄橙	10YR7/3	57-32 II
		碗	—	—	—	鐵 密 明緑灰	5G7/1 内外面 無文	X-0
		碗	—	—	—	鐵 密 明緑灰	7.5YR7/1 外面 亂弁文 内面 無文	56-33 III
		緑釉陶器	碗	—	—	鐵 密 オリーブ灰	10Y6/2 内外面 ロクロ痕	56-37 III
		青 磁	碗	124	—	鐵 密 明緑灰	5G7/1 外面 輪切れ 内面 無文	X-0
222	金属製品	キセル	長さ 65 幅 16	—	—	綠灰色	5G6/1	52-30 II
		キセル	長さ 64 幅 10	—	—	綠灰色	5G6/1	20-16 II
224	陶 器	擂 鉢	—	—	—	鐵 密 明黄褐	10YR6/6 八条の擂目	19-17 II
		擂 鉢	—	—	—	鐵 密 にぶい 黄橙	10YR6/3	53-32 II
226	石 製 品	砥 石	—	—	—	— にぶい 黄橙	10YR5/4	18-15 II
		鉄 製 品	釘	—	—	— 明黄褐	10YR6/8	51-39 II



第25図 遺跡詳細分布調査出土遺物(1)



第26図 遺跡詳細分布調査出土遺物(2)

表7 遺跡詳細分布調査出土遺物観察表(1)

探査番号	器種	計測値 (mm)		胎土	色調	調整技法	出土地点			
		口径	底径							
1	赤 壺	壺	122	54	43	細砂混 にぶい黄橙	10YR7/3	回転糸切り ロクロナデ	SP55	
2	内 黒	高台壺	182	78	71.5	鐵 密	にぶい黄橙	10YR6/3	回転糸切り ヘラミガキ→黒色化	SE1Y
3		壺	133	54	43	細砂混 にぶい黄橙	10YR7/3	回転糸切り ロクロナデ	SE1 振り方	
4		壺	120	58	42	粗砂混 にぶい橙	5YR6/4	回転糸切り ロクロナデ	SE1	
5		壺	142	70	46.5	細砂混 にぶい黄橙	10YR6/4	回転糸切り ロクロナデ	SE1 振り方	
6		壺	—	60	粗砂混 にぶい黄橙	10YR6/4	回転糸切り ロクロナデ 外面磨削	SE1		
7		壺	128	54	50	細砂混 にぶい黄橙	5YR7/3	回転糸切り ロクロナデ	SK2F	
8		壺	122	49	46	粗砂混 にぶい橙	7.5YR7/4	回転糸切り ロクロナデ	SK2	
9		壺	148	50	53	細砂混 浅黄橙	7.5YR8/3	回転糸切り ロクロナデ	SK3	
10	赤 燐	壺	128	54	50	粗砂混 にぶい橙	5YR7/3	回転糸切り ロクロナデ	SK3	
11		壺	126	53	47	粗砂混 橙	7.5YR6/6	回転糸切り ロクロナデ	SK3	
12		壺	128	54	45	粗砂混 にぶい橙	5YR7/3	回転糸切り ロクロナデ	SK3	
13		壺	—	66	粗砂混 にぶい橙	7.5YR7/4	回転糸切り ロクロナデ	SK3		
14		壺	129	54	45	粗砂混 橙	5YR7/6	回転糸切り ロクロナデ	SK3	
15		壺	125	51	49	粗砂混 にぶい橙	5YR6/4	回転糸切り ロクロナデ	SK4F	
25		壺	127	52	47	粗砂混 橙	7.5YR6/6	回転糸切り ロクロナデ	SK4F	
16		壺	128	47	45	細砂混 にぶい黄橙	5YR7/4	回転糸切り ロクロナデ	SK4	
17										
18	内 黒	高台壺	164	78	69.5	鐵 密	淡 橙	5YR8/3	回転糸切り ヘラミガキ→黒色化	SK9F
19		高台壺	154	—	—	鐵 密	にぶい橙	5YR7/3	回転糸切り ヘラミガキ→黒色化	SK9F
20		壺	134	56	45	細砂混 にぶい橙	5YR7/4	回転糸切り ロクロナデ	SK9	
21		壺	118	52	52	細砂混 明赤褐	5YR5/6	回転糸切り ロクロナデ	SK9	
22		壺	122	45	41	粗砂混 淡 橙	5YR8/3	回転糸切り ロクロナデ	SK11F	
23		壺	144	54	52	粗砂混 にぶい赤褐	5YR5/4	回転糸切り ロクロナデ	SK22	
24		壺	134	51	53	粗砂混 にぶい褐	7.5YR6/3	回転糸切り ロクロナデ	SK22F	
25		壺	126	64	50	粗砂混 橙	5YR6/6	回転糸切り ロクロナデ	SK22F	
26		壺	127	58	49.5	細砂混 にぶい褐	7.5YR6/3	回転糸切り ロクロナデ	SK22	
27	赤 燐	壺	125	65	53	粗砂混 にぶい橙	5YR7/3	回転糸切り ロクロナデ	SK26F	
28		壺	123	60	48	粗砂混 にぶい橙	7.5YR7/4	回転糸切り ロクロナデ	SK26F	
29		壺	133	53	49	粗砂混 橙	7.5YR6/6	回転糸切り ロクロナデ	SK26F	
30		壺	126	56	43	細砂混 にぶい褐	7.5YR6/3	回転糸切り ロクロナデ	SK26F	
31		壺	127	56	49	粗砂混 にぶい橙	5YR7/4	回転糸切り ロクロナデ	SK26Y	
32		壺	126	52	51	粗砂混 にぶい橙	5YR7/4	回転糸切り ロクロナデ	SK26F	
33		壺	120	51	50	粗砂混 にぶい橙	7.5YR7/4	回転糸切り ロクロナデ	SK26F	
34		壺	126	50	48	粗砂混 にぶい橙	5YR7/3	回転糸切り ロクロナデ	SK26F	
35		壺	156	75	55.5	細砂混 淡 橙	5YR8/3	回転糸切り ロクロナデ	SK26	
36	内 黒	高台壺	178	78	73	細砂混 にぶい橙	5YR7/3	回転糸切り ヘラミガキ→黒色化	SD5F	
37	赤 燐	壺	133	48	51	粗砂混 にぶい橙	7.5YR7/4	回転糸切り ロクロナデ	SD5	
38		壺	136	50	50	粗砂混 にぶい橙	7.5YR7/3	回転糸切り ロクロナデ	SD5	
39		壺	128	48	47.5	粗砂混 淡 橙	5YR8/3	回転糸切り ロクロナデ	SD5F	
40		壺	122	49	50	粗砂混 にぶい橙	7.5YR7/4	回転糸切り ロクロナデ	SD5F	
41	赤 燐	壺	127	52	45.5	粗砂混 にぶい橙	7.5YR7/4	回転糸切り ロクロナデ	SD5	
42		壺	128	53	48	粗砂混 にぶい橙	5YR7/4	回転糸切り ロクロナデ	SD5	
43		壺	145	66	50	粗砂混 淡 橙	5YR8/4	回転糸切り ロクロナデ	SD6F	
44		壺	130	55	48	粗砂混 にぶい橙	7.5YR7/3	回転糸切り ロクロナデ	SD6F	
45		壺	110	—	—	粗砂混 橙	7.5YR7/6	墨塗転用か?	SD6	
46	内 黒	高台壺	170	66	63	細砂混 にぶい橙	7.5YR7/3	ヘラミガキ→黒色化	SD7	
47		壺	125	60	48.5	細砂混 にぶい黄橙	10YR7/3	回転糸切り ヘラミガキ→黒色化 二次焼成あり	SD7	

表8 遺跡詳細分布調査出土遺物観察表(2)

押出番号	器種	計測値 (mm)			胎土色調	調整技法	出土地点
		口径	底径	器高			
48	内 黒 壱	125	45	57	緑 疊 にぶい黄橙	10YR7/3 回転糸切り ハラミガキ→黒色化	SD7
49	壺	139	55	51	粗砂混 淡 橙	5YR8/4 回転糸切り ロクロナデ	SD7
50	赤 烧 耳皿	57	51	38.5	粗砂混 淡 橙	5YR8/4 回転糸切り	SD7F
51	壺	136	54	52.5	粗砂混 橙	7.5YR7/6 回転糸切り ロクロナデ	SD7
52	高台壺	189	85	72	粗砂混 にぶい黄橙	10YR7/3 回転糸切り ハラミガキ→黒色化 外面墨書き「鏡」	SD8
53	内 黒 高台壺	—	80	38	細砂混 にぶい黄橙	10YR7/3 回転糸切り ハラミガキ→黒色化	SD8
54	高台壺	—	70	20	粗砂混 灰 白	10YR8/2 回転糸切り ハラミガキ→黒色化 底部墨書き「主」	SD8F
55	壺	134	56	53	粗砂混 にぶい黄橙	7.5YR7/4 回転糸切り ロクロナデ 墨付書き	SD8
56	壺	114	45	46	粗砂混 にぶい黄橙	7.5YR7/4 回転糸切り ロクロナデ	SD8
57	壺	131	42	44	粗砂混 橙	5YR6/8 回転糸切り ロクロナデ	SD8
58	壺	132	58	47	粗砂混 橙	5YR6/6 回転糸切り ロクロナデ	SD8
59	赤 烧 壱	132	52	43.5	細砂混 灰 白	5YR8/2 回転糸切り ロクロナデ	SD8F
60	壺	128	60	39	粗砂混 にぶい橙	7.5YR7/3 回転糸切り ロクロナデ	SD8
61	壺	126	57	45	粗砂混 にぶい橙	5YR7/4 回転糸切り ロクロナデ	SD8
62	壺	128	45	48	粗砂混 にぶい橙	7.5YR6/4 回転糸切り ロクロナデ	SD8
25	内 黒 壱	121	51	43.5	粗砂混 橙	5YR6/6 回転糸切り ロクロナデ	SD8
64	壺	126	46	41	粗砂混 橙	5YR6/6 回転糸切り ロクロナデ	SD8
66	内 黒 壱	127	50	50	細砂混 灰 橙	5YR6/2 回転糸切り ハラミガキ→黒色化	SD21F
67	壺	136	54.5	54	粗砂混 明褐灰	5YR7/2 回転糸切り ハラミガキ→黒色化	SD21F
68	壺	127	60	42	粗砂混 にぶい橙	7.5YR7/3 回転糸切り ロクロナデ	SD46F
69	赤 烧 壱	136	76	33	粗砂混 灰 白	10YR8/2 ハラ切り ロクロナデ 墨書き	SD50
70	壺	128	54	41.5	粗砂混 浅黄橙	7.5YR8/3 回転糸切り ロクロナデ	SD60F
71	土 繩 長さ50 径24				細砂混 明褐灰	7.5YR7/2	SD103F
72	土 製品 土 繩 長さ45 径22.5				細砂混 明褐灰	7.5YR7/2	SD103F
73	土 繩 長さ38 径23.5				粗砂混 にぶい橙	7.5YR7/3	SD103F
74	赤 烧 壱	129	46	58	粗砂混 淡 橙	5YR8/3 回転糸切り ロクロナデ	SX30F
75	壺	131	55	53	粗砂混 淡 橙	5YR8/4 回転糸切り ロクロナデ	SX30F
76	壺	138	63	54.5	粗砂混 にぶい橙	5YR7/4 回転糸切り ロクロナデ	SX100F
77	皿	124	48	26	粗砂混 淡 橙	5YR8/3 回転糸切り	SX100
78	石 製品 石 帯	長さ29.5 厚さ5	—	—	黑	7.5YR17/1	X-0

V まとめ

本書は、平成4年度県営圃場整備事業（月光川上流地区）に係る石田遺跡の調査成果をまとめたものである。調査は、調査時期（5月～8月）の関係から麦転作地を早く完了させるため、前年度の遺跡詳細分布調査で確認された遺構、遺物が集中する地域の中で、整備事業計画により遺構、遺物が存在する地域が削平される遺跡北部（A区）を早めの5月11日から開始し、転作作物を早刈りし7月10日に調査を終了した。南東部（B区）は、引き続き調査区域として進めた。グリッドは、A区からB区にかけて5m単位に升目の調査区とし、A区（9～22・6～20グリッド5000 m²）、B区（50～60・29～43グリッド3,000 m²）の計8,000 m²を調査した。

1 遺構について

A区で検出された遺構は、掘立柱建物跡、土坑、溝状遺構、組合わすことが出来なかった柱穴のほか、旧河川跡、現水田以前に設置された旧排水路等が確認された。検出され遺構として登録された数はA区では311遺構、B区では387遺構を数え、総数698遺構である。遺構は掘立柱建物跡、土坑、組合わすことが出来なかった柱穴、溝状遺構、性格不明遺構、柱穴列、旧排水路等が確認された。A区での遺構からの様相では、S G 21とした旧河川跡の南岸に集落を構えている。調査からは遺構の広がりが東部に広がる様子が窺える。建物跡は三棟確認している。東西四間、南北三間の建物、東西三間、南北二間が二棟の計三棟である。各々近接し重複するが、東西棟である。旧河川の流路に沿った存在で、第16図に柱穴内出土の遺物を図示した。S B 1建物跡の柱穴の埋土からは、1・2の赤焼土器壺片と、14の内黒土器壺が出土している。時期は、14の壺の底部には糸切り離しが施されていることや、柱穴の上部に火山灰が混入していることから、10世紀第1四半期と推測される。

土坑は、A・B区で79基が確認されている。第8～12図には断面から観察した掘り込みの形状から三つに分け図示した。ひとつは形状がやや広くなるU字状で、30～50cmと深い土坑（SK 31・32・66・525・527）である。覆土は、暗黒褐色粘質土や黒褐色粘質土で、炭化物粒子や炭化物ブロックを含む。土坑中位に土器片や礫が混在し、不燃物を遺棄した土坑と推測する。もうひとつは皿状となる浅い形状で、断面の深さが7～18cmの土坑（SK 22・24・25・28～30・33・34・36・37～39・42・44・48・49・52・60・69・71・72・75・78・98・115・116・510・528～530・573・601）である。土坑の確認面には土器等の遺物が多く検出されている。蓄えを行う穴として掘り込まれたものと推測する。また、前述の二つの遺構に組みされない中間の20～28cmの深さで、断面形が台状となる土坑（SK 41・46・47・50・70・502・527・756・758・760）がある。中でも、

中位の深さの部類にしたSK 46土坑（第9図）は、SK 47土坑と重複し、確認面ではSK 46土坑がSK 47土坑を切り込んで掘り込まれ、SK 47土坑が廃棄された後にSK 46土坑が營まれたものと考える。SK 46土坑の確認面上一帯には白色の火山灰が丸く帶状に径約120cmに広がり、一瞬に流入した感が窺える。埋没時期が限定される証左である。

溝状遺構は第12～15図に記録した溝跡を載せた。ほとんどが南北に掘り込まれ、数条がまとまるものが認められた。また、第4図で示したB区のSD 771溝跡とSD 766溝跡のように東西方向に平行する溝も確認された。両溝間の幅は220～250cm、両溝の長さは15m程度で調査区壁に切られるものの、道路状に存在している。B区で確認された数条にまとまる溝跡は、同方向に3～10mほどに存在し、あたかも畑の排水に掘り込まれた感を示す。土壤の分析を実施していないため用途は不明だが、幅7m、長さ12mの範囲に集中していることから推測した。これら溝状遺構の中には、覆土に白色の火山灰が流入しているものもあり、土坑と同様の様相を示し、營まれた時期が推定される。

2 出土遺物について

本遺跡からの出土遺物には、土師器、内黒土器、須恵器、赤焼土器、陶磁器、土製品、石製品、鉄製品等がある。土器は赤焼土器が出土遺物中最も多い。第IV章では器形や法量について簡単に記載したが、10世紀を中心とした形状を窺わせる。しかし土師器は8世紀台末の様相がみえる。壺形土器が主体で、それに伴う須恵器の短頸壺や甕等の古い様相を呈する土器が出土している。土坑や溝状遺構からの出土が多く、廃棄や、豪雨による流入によってもたらされた感を受ける。特に、土坑や溝状遺構には白色の火山灰が充満する遺構が確認されており、平安時代延喜15年（915）扶桑略記に「出羽国言上兩灰降高二寸」の記載があることから、時期的な移行としては10世紀代第1四半期から第3四半期の遺物と推測する。

3 遺跡の性格について

遺跡は圃場整備という限定された範囲での調査であったが、前年度の遺跡詳細分布調査を含め、東西約700m、南北600mの42万m²という広範囲な遺跡の内、調査面積8,000m²という約2%の調査面積であったが、遺構では建物跡や、土坑、溝状遺構等が、分布調査では土坑、溝状遺構、井戸跡等が確認されたほか、遺物では、共體形態の壺・皿・碗形土器、煮沸形態の壺形土器、貯蔵形態の壺・甕等が出土している。また、硯、石帶、土錐、砾石等も出土している。時期は降灰の記録から平安時代の10世紀第1四半期を中心と營まれた遺跡と推測する。しかし、遺物で石帶が出土することから、周辺に存在する公的機関に勤務する者の集落と考える。これらについては再度、遺構や遺物を検討し、飽海地区での平安時代の社会や様相を考えることが必要である。

報告書抄録

ふりがな	いしだいせきはっくつちょうさほうこくしょ						
書名	石田遺跡発掘調査報告書						
副書名							
卷次							
シリーズ名	山形県埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第184集						
編集者名	野尻侃・阿部明彦・渡辺俊一						
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター						
所在地	〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番地1号 TEL 023-672-5301						
発行年月日	西暦1993年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査期間 (m ²)	調査原因
いしだいせき 石田遺跡	山形県 鶴岡市 遊佐町 大字野沢 大字石田	6461	2108	39° 1' 59"	139° 54' 41"	19920511 19920821	8,000 県営は場 整備事業 (月光川上流)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
石田	集落跡	平安時代	堀立柱建物跡 井戸跡 土坑 溝状遺構 旧河川跡	土師器 須恵器 赤焼土器 硯 土錐 砥石 青磁	延喜15年(AD915年) に降灰した記録が ある火山灰が本遺跡 の遺構に堆積してい る。		

図 版



遺跡全体航空写真(A区)



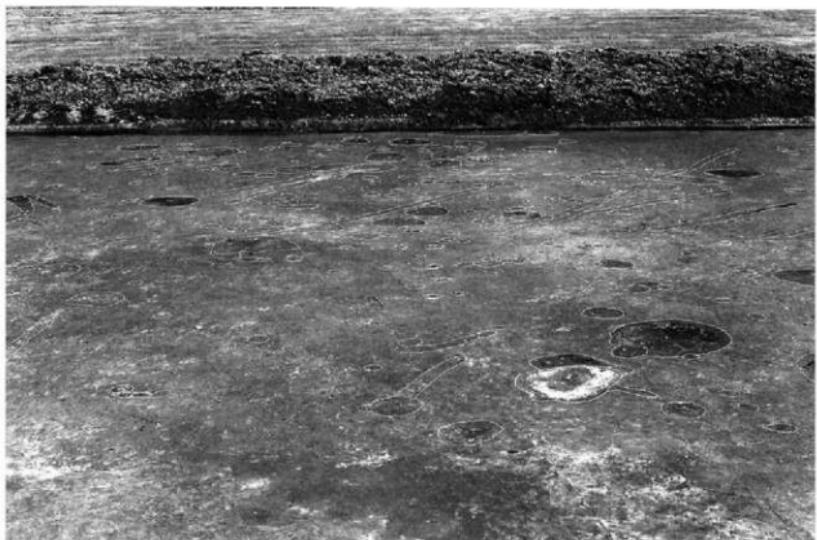
遺跡全体航空写真(A区)



遺跡遠景(北東から)



A区遺構検出状況(南部)



A区遺構検出状況(中央部)



A区遺構検出状況(北部)

図版 4



B区道構検出状況(北半部)



調査風景



A区遺構検出状況全景



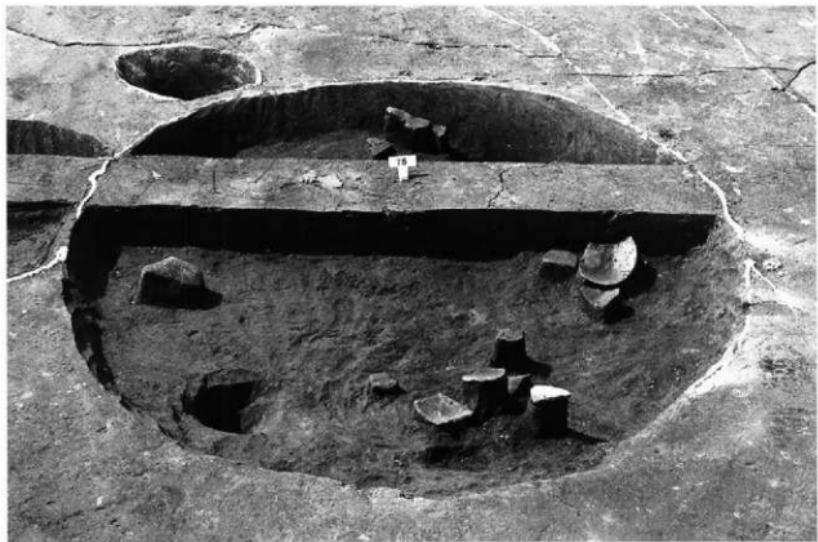
SB1·2·3建物跡検出状況



SB4建物跡検出状況



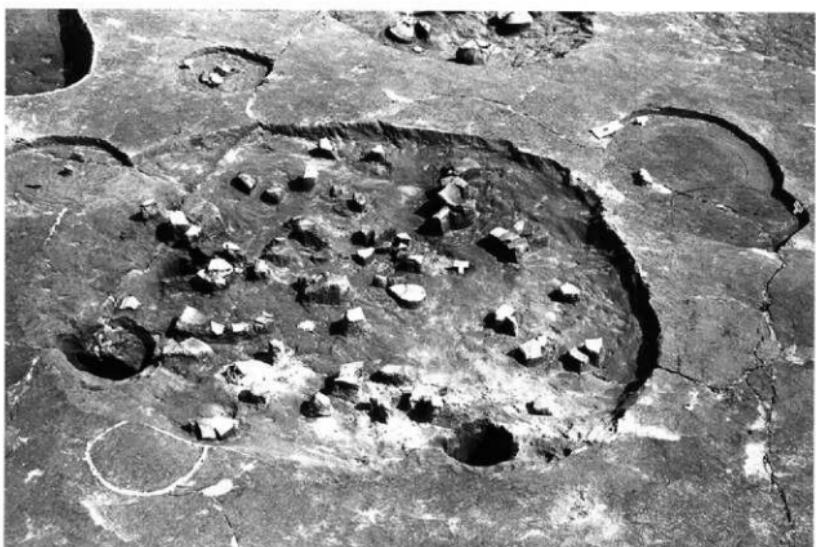
SB5建物跡検出状況



SK75土坑土層断面



SD67溝状遺構



SK24土器出土状況



SK31 土坑土層断面



SK32 土坑土層断面



SK50 土坑・EP84 ピット土層断面



SD55・56 溝状遺構土層断面



SK66 土坑土層断面



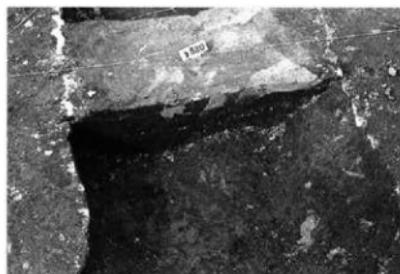
SD67 溝状遺構土層断面



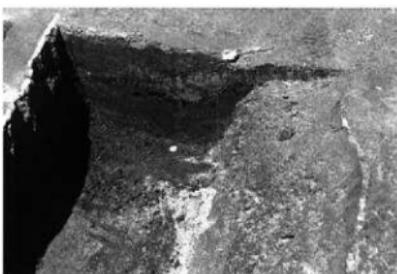
SK70 土坑土層断面



SD73・74 溝状遺構土層断面



SD520 溝状遺構土層断面



SD520 溝状遺構土層断面



SK522・523 土坑土層断面



SD534・535 溝状遺構土層断面



EP549 ピット土層断面



SD577 溝状遺構土層断面



SD560 溝状遺構土層断面



SD557 溝状遺構土層断面



SK22 遺物出土狀況



SK23・25 遺物出土狀況



SK28 遺物出土狀況



SK33 遺物出土狀況



SK38 遺物出土狀況



SK42 遺物出土狀況



SK50・84 遺物出土狀況



SK52 遺物出土狀況



SK48 遗物出土状况



SK75 遗物出土状况



EP504 · 507 完掘状况



EP572 · 573 · 508 完掘状况



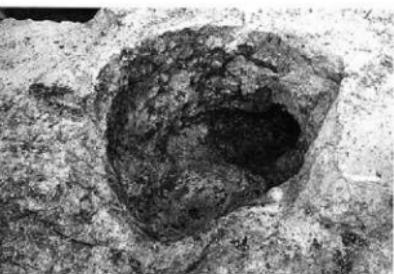
SD532 · 575 · 576 · 571 完掘状况



SK756 完掘状况



SK760 完掘状况



EP764 完掘状况



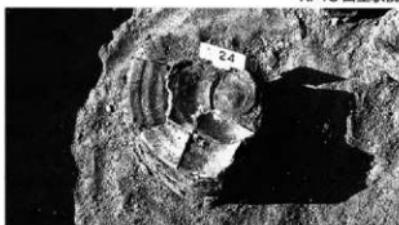
RP17 出土状況



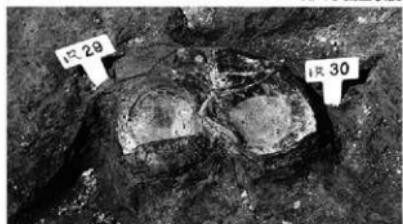
RP18 出土状況



RP19 出土状況



RP24 出土状況



RP29・30 出土状況



RP32・33 出土状況



RP51 出土状況



RP54～56 出土状況



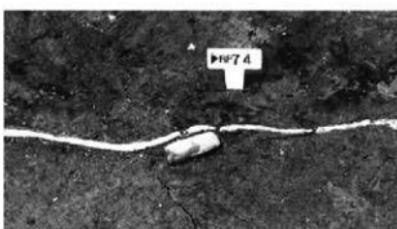
RP63 出土状況



RP66 出土状況



RP72 出土状况



RP74 出土状况



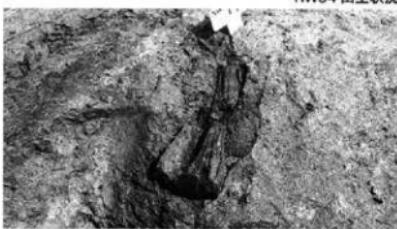
RP87 出土状况



RW94 出土状况



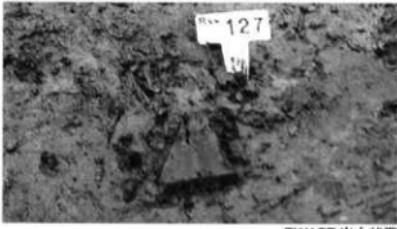
RW95 出土状况



RW117 出土状况



RW122 出土状况



RW127 出土状况



RP134 - 135 出土状况



RP137 出土状况



4



5



6



8



9



10



11



13



15



16



17



18



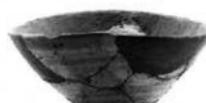
19



20



21



24

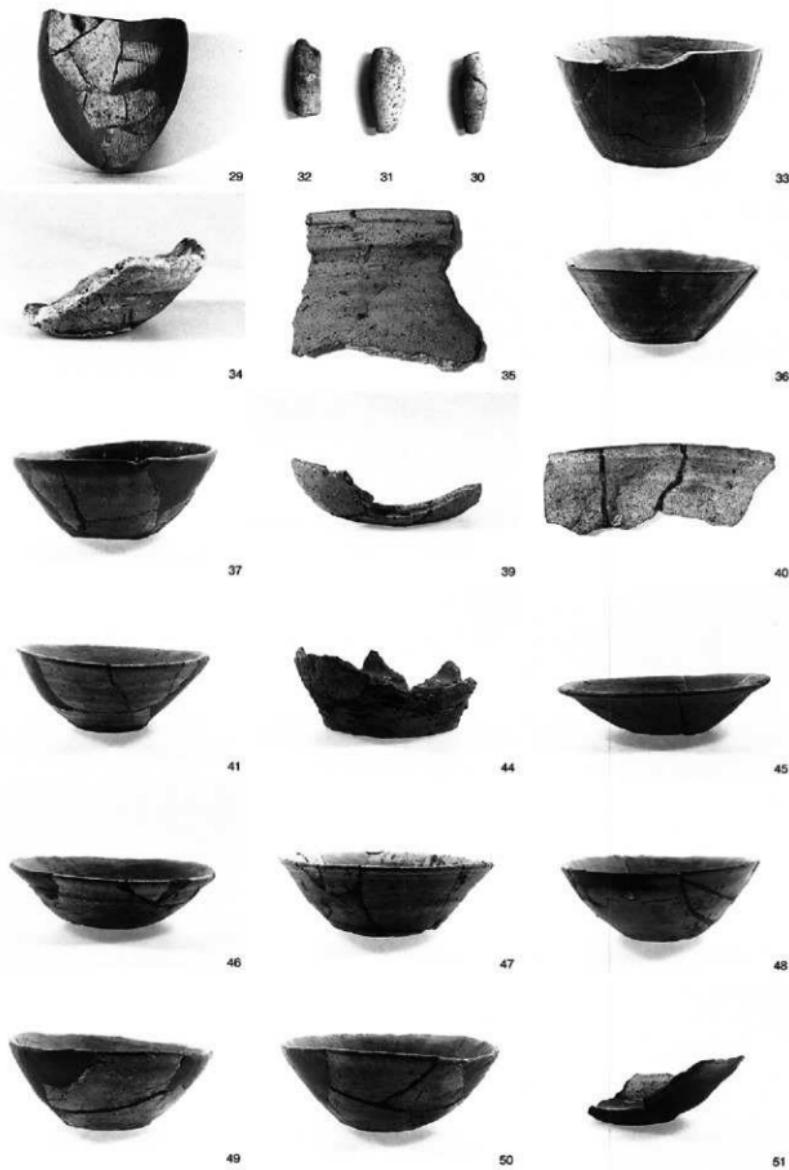


26



27

圖版 16





52



53

54



55



56

57



58



59

60



61



62

63



67



68



69



70



71



72



73



74



75



77



78



79



80



81



82



83



84



85



86



88



89



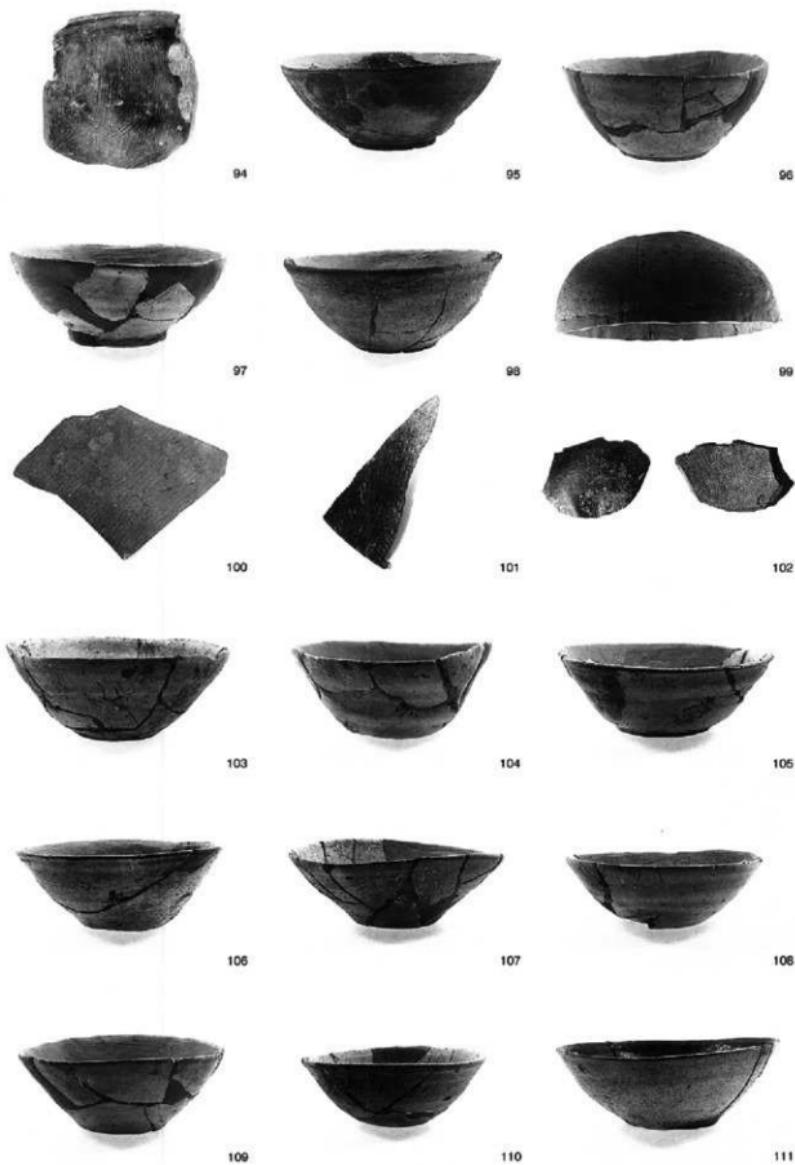
90



91



92





112



113



114



115



116



117



118



119



120



121



122



123



124



125



126



127



128



129

図版 21



130



131



140



141



142



143



144



145



146



147



148



149



150



151



154



155



156



157



159



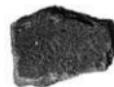
160



161



162



163



164



165



166



167



168



169



170



171



172



173



174



175



194



195



196



197



198



199



200



201



202



203



204



205



206



207



208



209



210



217



218

219

220



221

224

225



226

227

228



229

230

231

222



232

233

234

227

223



235

236

237

223



226



分-1



分-2



分-3



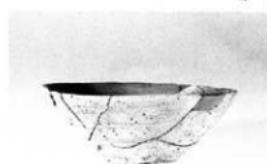
分-4



分-5



分-7



分-8



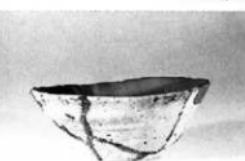
分-9



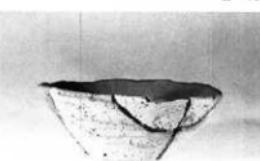
分-10



分-11



分-12



分-14



分-15



分-16



分-17



分-18



分-19



分-22



分-23



分-25



分-27



分-28



分-29



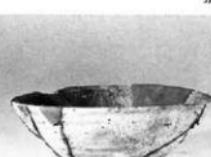
分-31



分-32



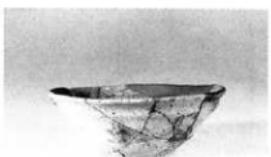
分-36



分-37



分-40



分-41



分-42



分-43



分-44



分-46



分-47



分-48



分-49

山形県埋蔵文化財調査報告書第184集

いし だ
石 田 遺 跡

発掘調査報告書

平成5年3月31日発行

発行 山形県教育委員会

印刷 株式会社 田宮印刷所